

古墳時代仿製鏡の変遷とその特質

森 下 章 司

【要約】 古墳時代に中国鏡を模倣して大量に製作された仿製鏡については、これまで時間的位置づけがほとんどなされていなかった。本稿では、鏡の文様の一番外側の部分にあたる外区文様が時間の指標として有効であることを示し、内区文様の分類によって得られた系列の変化と外区文様の変化の組合せを対照して仿製鏡の編年を組立てた。その結果、従来一元的と評価されがちであった仿製鏡の変遷を多数の系列の変化の平行ととらえ、さらに系列の大きな交代が示す、二つの画期が存在することを明らかにした。この変革は同時期に用いられた中国鏡の変化や分布の変化とも結びつき、鏡のもつ意味自体の変革とつながるものと考える。仿製鏡の生産は文様上の退化を繰り返しながらも、古墳時代の終末に至るまでの長期間存続した。それは社会的状況の変化に対して、幅広くかつ柔軟に対応しえた鏡の特質を象徴しており、日本の古代社会において鏡が盛行した理由をも求められる。

史林 七四巻六号 一九九一年 十一月

一 は じ め に

中国から大量の鏡を輸入し、さらにそれを模倣して種々の日本製の鏡、すなわち仿製鏡が製作されたことは、日本の弥生・古墳時代を特徴づける風習である。鏡という一器物に対するこのように特徴的な社会的対応の状況と要因の解明は、日本の古代社会の特質を考える重要な手がかりとなろう。

しかし従来の研究では、中国鏡と、特殊な性質をもつ三角縁神獸鏡とに関心が集中し、数においてそれらに数倍し、総数二千面に及ぶとされる古墳時代の仿製鏡に関しては本格的な検討が進んでいなかった。特に基礎となる編年研究が十分

でなく、古墳から出土する仿製鏡の多くは、遺物自身から年代的な位置づけをおこなうことができないのが現状である。これは仿製鏡の特に主要な要素となる文様が非常に多様で、それらを整理する指標が見いだされていないことによる。

仿製鏡の分類自体には、中国鏡との対比において、はやくから関心が寄せられていた。富岡謙蔵^①は、模倣の対象となった中国鏡との比較、鏡式の設定を進め、その後の研究の基礎を固めた。後藤守一^②は日本出土鏡の集成を進める中で、型式分類をおこなっている。しかし年代に関しては、梅原末治が伝世の現象を指摘するまで、模倣の対象となった中国鏡の製作年代がそのまま仿製鏡の年代にあてられていた。

小林行雄は前期古墳二分論^④の中で、三角縁神獸鏡の仿製鏡が方格規矩鏡や内行花文鏡の仿製鏡に先行して作られたという見解を示した。それは仿製三角縁神獸鏡のような忠実な模倣品が最初に出現し、次に様々な鏡式を組合せた仿製鏡が生み出され、さらに中国鏡からの変形が進んでゆく、という仿製鏡の変遷観についても初めて論じたものであった。近藤喬^⑤はこれを受け継ぎ、第一次仿製鏡(仿製三角縁神獸鏡)、第二次仿製鏡(方格規矩鏡の仿製鏡など外区に菱雲文をもつ鏡と内行花文鏡の仿製鏡)、第三次仿製鏡(珠文鏡や振文鏡等小型の仿製鏡と鈴鏡)の三段階に整理している。このような仿製鏡の変遷観は主として、三角縁神獸鏡とその仿製鏡の分析を軸として進められてきたものであり、他の仿製鏡についてはそれ自身の分析によるところは少ないのである。

仿製鏡の全体的な分類については、新たに樋口隆康や小林三郎の試みがある^⑦。しかし、それは特に分類名称の設定および中国鏡との対応関係を重視したものであり、各分類項目同士の時間的な関係は明確には言及されていない。

一方で、個々の鏡式については細かい分析が加えられている^⑧。福岡県沖ノ島遺跡出土の仿製鏡を取り上げ、多様な仿製鏡の文様にも、段階的な変化の認められることをはやくに示したのは原田大六^⑨であり、特に仿製方格規矩四神鏡系について、四神に起源する獸文の細かな変化を追いかけることによって一つの系列を示し、他の単位文様と比較して型式設定をおこなったのは田中琢^⑩である。田中はまた、仿製鏡の各系列間に認められる単位文様の交換に着目し、系列間の時間的関

係を定める手がかりとした。しかしそこで取り上げられた共通性は適用範囲が狭く、これらを結び付けて仿製鏡全体の時間的関係を把握する視点がまず必要である。

本稿では、仿製鏡全体の編年の作成を第一の目的とする。従来、ややもすれば、中国鏡の忠実な模倣品からの退化、大型品から小型品、というように全体が一元的な変化をしたものと考えられてきた。しかし、以下に明らかにするように仿製鏡の多様性には明らかに系統の違いが含まれており、中途から新たな模倣品が作られたり、大きな変化も認められる。

時間的な整理をおこなうことにより、それらの違いを明らかにし、仿製鏡の変遷を跡づける基礎的な作業をおこなうと同時に、その変遷の中に古墳時代における仿製鏡の特質を浮かび上がらせることを目的とした。

- ① 富岡謙蔵「日本仿製古鏡について」(『古鏡の研究』一九二〇年) 三
四三―四一五頁。
- ② 後藤守一『漢式鏡』(『日本考古学大系』第一巻 一九二六年)。
③ 梅原末治『讃岐高松石清尾山石塚の研究』(『京都帝国大学文学部考古学研究报告』第二二冊 一九三三年) 七九―八二頁。
- ④ 小林行雄「前期古墳の副葬品にあらわれた文化の二相」(初出『京都大学文学部五十周年記念論集』一九五六年 七二―一七四頁)『古墳時代の研究』一九六一年所収 一六一―一九〇頁。
- ⑤ 近藤喬一「鏡」(『小野山節編』『古代史発掘』第六巻 古墳と國家の成立 一九七五年) 七二―七七頁。
- ⑥ 近藤喬一「三角縁神獸鏡の仿製について」(『考古学雑誌』第五九巻 第二号 一九七三年) 一―二八頁。小林行雄「仿製三角縁神獸鏡の研究」(『古墳文化論考』一九七六年) 三七九―四二九頁。
- ⑦ 樋口隆康『古鏡』(一九七九年)。小林三郎「古墳時代倣製鏡の鏡式について」(『明治大学人文科学研究所紀要』第二二冊 一九八二年) 一―七九頁。
- ⑧ 小林三郎「振文鏡とその性格」(『日本古代史論苑』遠藤元男先生頌寿記念論文集 一九八三年) 四一―四五八頁。小沢洋「振文鏡について」(『倭ヶ谷古墳群』君津郡市文化財センター発掘調査報告書第三十七集 一九八八年) 八七―九九頁。富田和氣夫「一―号墳出土四獣鏡をめぐる諸問題」(三条市教育委員会『保内三王山古墳群測量・発掘調査報告』一九八九年) 一四六―一五三頁。
- ⑨ 原田大六「十七号遺跡の遺物」(宗像神社復興期成会『統沖ノ島』一九六二年) 二八一―一三頁。
- ⑩ 田中琢「鐔劍鏡」日本原始美術大系四 講談社(一九七七年)。同「古鏡」日本の原始美術八 講談社(一九七九年)。同「古鏡」日本の美術一七八 至文堂(一九八一年)。同「方格規矩四神鏡系倣鏡分類試論」(『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立三〇周年記念論文集 一九八三年) 八三一―〇四頁。

(1) 編年の視点

仿製鏡の文様はもっとも大きな面積を占める内区の部分と、その外側のやや厚くなった部分の外区と、大きく分けて二つの区画で構成される。この内区文様こそが鏡の文様の中心であり、製作者の表現意図の主眼となる部分であって、それゆえ古鏡の研究者はまずこの内区文様を分類の基準としてきたのである。先に紹介した田中琢の研究が一例を示すとおり、仿製鏡はこの内区文様において一連の変化を示す系列によって厳密な分類が可能である。原鏡の違いや図像の数の違いを中心とした従来の分類に対し、こうして設定した系列は、時間、製作者、ひいては製作意図のまとまりを強固に示す単位として扱うことができる。

ところが仿製鏡の内区文様は非常に多様であるため、きわめて多くの系列を設定することになるうえ、現在類似する資料が見あたらず、系列としてまとめられない資料も数多く生まれることになる。したがって仿製鏡全体の編年を目的とする場合、そうした多数の系列を関連づけ、かつ系列としてまとめられない資料についても、他と結びつけられるような、別の基準が必要となる。

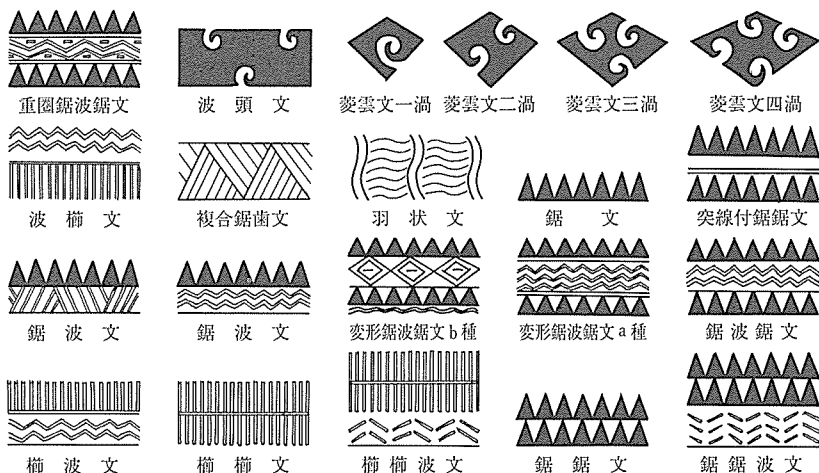


図1 古墳時代仿製鏡の外区文様の分類

私は鏡の内区文様に加えて、外区文様の変遷と組合せの変化が仿製鏡の編年を組立てる上で重要と考える。外区文様は変異の幅が適度に小さく、時間差と大きな系統差以外の違いを吸収している。鏡を絵画にたとえるなら内区文様にあたる絵の本体については製作者やモデルの違いによって多様な作品が生み出されたのに対し、外区にあたる額縁については一定の範囲で画一性が生じることになる。検討の結果、外区文様には、①複数の系列において、内区文様の変化にとまなつて変化、交代するもの、②系列内で変化、交代したものが、他の系列に引き継がれるもの、③型式学的な推移として説明できる変化があることが判明した。これらは時間の変化の反映として、多様な仿製鏡全体の変遷をまとめる指標となると考える。なお②や③に関しては文様構成が重要であるため、複数の単位文様で構成される外区文様については、鋸歯文↓鋸、波文↓波、櫛歯文↓櫛のような略号を使い、鏡の縁部から順に、鋸歯文+波文+鋸歯文↓鋸波鋸文のように呼び換えた名称を用いることにする（図一）。

（2）系列の設定

同一の文様を祖形とし、変化の方向につながりをもつ明らかに同系列となしうるものを次頁表一のような二十七の系列として抽出した^①。これらの外区文様を整理することによって、他の内区文様をもつ仿製鏡をも関連づけることができるものと考えられる。表一では各系列内での型式分類、それと外区文様との対応関係を示している。なお従来分類ではあまり考慮されていなかった点であるが、同じ中国鏡の鏡式を模倣したものでも、表現の特徴、変化の方向などの点において、明らかに異なる系列として区別できるものがある。あるいは別の時期、別の製作者に属するものと推定される場合もある。ここではアルファベットの大文字を用いてそれを区別した。また一つの系列から派生した系列、あるいは互いに強く関連し、平行して存在した系列はアルファベットの小文字を用いて区別した。

型式分類	外区文様	図番
a1 3つの図像が揃って表されているもの。	菱雲4-2 突鋸鋸	2-1
a2 獣毛状表現が略されたもの。	菱雲2 鋸波鋸 獣脚	2-2
a3 巨を銜む獣像が渦巻状の表現と化すか、あるいは省略。	斜緑鋸波鋸	
a4 神像の長い方の胴が分離して表されるようになったもの。	斜緑鋸波鋸	2-3
b1 短い胴をもたない点以外は a1 とほぼ同じ図像をもつもの。	菱雲2 蕨手	2-4
b2 巨を銜む獣像を省略したもの。	菱雲2-0 複合鋸	2-5
b3 獣毛表現を省略したもの。	複合鋸 斜緑鋸波鋸	2-6
1 対置式の構図を守り、神像の脇には獣座状表現をもつもの。 2 三神三獸式になり、獣座表現が省略されたもの。	菱雲3-2 斜緑鋸波鋸 菱雲2 斜緑鋸波鋸	
1 主神を挟んで両脇に脇侍がある。 2 脇侍が縮小、消失したもの。	斜緑鋸波鋸 菱雲2 斜緑鋸波鋸 菱雲2	
1 田中塚分類 J A・J B I・直模式	菱雲4-3 獣	3-1
2 J B II 式	菱雲4	3-2
3 J D I 式	菱雲3-2 獣 鳥	
4 J D II 式	菱雲3-2 突鋸鋸 波鋸	3-3
5 J E 式	突鋸鋸	3-4
6 J F 式	突鋸鋸	3-5
	菱雲2 突鋸鋸	3-6
1 獣毛文が立体的に表されたもの。 2 獣毛文が小さく偏平なもの。	羽 複合鋸 菱雲変 複合鋸 素	4-1 4-2
1 俵文が大きく立体的なもの。 2 教本の平行線を東ねただけの細い俵文を主文とするもの。	羽 複合鋸 鋸 素	4-3
1 羽が長く大きなもの。4乳のものが多い。 2 羽が短く簡略化した表現のもの。5乳のものが多い。	突鋸鋸 鋸	4-4
1 房飾りが大きく、10本近い線で表現されているもの。 2 房飾りが小さく、5本程度の線で表現されているもの。	突鋸鋸 素 鋸	5-2
1 三日月形が大きく節もはっきりして、獣状に見えるもの。 2 三日月が小形化するが、節ははっきりしているもの。	突鋸鋸 鋸 素	5-1
1 獣像の後脚が明確に表現されているもの。 2 後脚が省略されたもの。	突鋸鋸 鋸波鋸 突鋸鋸	5-3
1 胴部の縮小表現をつけたもの。 2 頭部脇の翼手状の表現を残すもの。 3 翼手状表現も失ったもの。	突鋸鋸 突鋸鋸 複合鋸 鋸	5-4
1 頭部が正面形と縦向きの2種類の獣像が表されたもの。 2 正面形の獣像一種類となったもの。	重圈鋸波鋸 突鋸鋸	
	素	6-5
	素	6-6
1 八花文で雲雷文と四葉座をもつもの。 2 七、六花文で多くが雲雷文を欠くもの。 3 五花文で雲雷文、四葉座を欠くもの。	素 素 鋸 突鋸鋸 素 鋸	6-7 6-8

表1 古墳時代仿製鏡の系列

系 列 名	内 区 文 様	原 鏡
単頭双胴神鏡系	短い胴と乳に巻きつく長い胴の2種類の胴部をもった神像，巨を銜みS字形の胴をもつ獣像，外周をめぐる獣毛状の表現の3つの図像の組合せて内区を構成。長い方の胴のみをもつ神像を用いたものをb系として区別する。	環状乳神獸鏡 同向式神獸鏡 盤竜鏡 以上3鏡式の合成
対置式神獸鏡系	6乳で区画したうち，対向する2つの区画に神像を置き，それを挟む区画に獣像が対置する。この配置が乱れて，三神三獸式となる。	対置式神獸鏡と斜縁神獸鏡の合成
斜縁神獸鏡A系	4乳で区画した中に，衣の裾の膨らんだ神像が2体，S字形の獣像が2体，交互に配される。神像の両脇に脇侍がつく。	斜縁二神二獸鏡
方格規矩四神鏡系	方格とT字形，L字形，V字形文様で区切られた間に，四神に起源する獣像を線表現で表す。四神の中でも特に，後ろを振り向いた白虎の像を取り出し連ねるようになる。田中琢分類のJC式は，傍系列として区別する。	方格規矩四神鏡
方格規矩鳥文鏡系	方格，TLV文間に細線表現の鳥を8羽おく。	方格規矩鳥文鏡
獣毛文鏡系	単頭双胴神鏡系の獣毛文とほぼ同じものを連ねる。樋口隆康分類I型。	単頭双胴神鏡系
俵文鏡系	平行線を東ねたふくらみを縦線でくるもの。樋口分類II型。	単頭双胴神鏡系
羽文鏡系	旋回する鳥の羽状の表現を乳の間に巡らす。樋口分類V型。	単頭双胴神鏡系
房文鏡系	獣像の後部に似た房飾りを乳の間に連ねる。樋口分類III・IV型。	
三日月文鏡系	節の入った三日月形のふくらみを連ねるもの。樋口分類III・IV型。	
鳥頭四獸鏡系	鳥頭のように尖った口先をもつ獣像を4乳の間に配する。	上方作銘半肉彫獸帶鏡
神頭鏡系	神像の頭部のみを胴と切り離して，6乳あるいは4乳の間に各1個置く。	単頭双胴神鏡系
斜縁四獸鏡A系	正面を向いた獣像と，縦向きの頭部をもつ獣像が2体ずつ配される。	斜縁四獸鏡
内行花文鏡A系	径20cmを越える大型品で，九や七などの変則的な花文数のものが多い。	内行花文鏡
内行花文鏡B系	径は10cm以上で，花文間には重弧文や獣文をいれ，雲雷文と花文の位置が逆転した特異な文様構成。	内行花文鏡
内行花文鏡C系	径が16cm～8cm前後の中型品で，花文間には結紐文，3つの珠文，珠文充填などがある。	内行花文鏡

内区文様の型式分類		外区文様	図番
1	一列の珠文が不均等に巡らされたもの。	素	6-1
2	一列の珠文が整然と巡らされたもの。	素 鋸	
3	二列の珠文が巡らされたもの。	素 鋸 斜緑鋸波鋸	
4a	三列以上の珠文が乱雑に埋められたもの。	鋸波鋸 突鋸鋸 櫛波	6-3
4b	二列程度の珠文をまばらに埋めるもの。	鋸波 櫛櫛 櫛波	6-4
1	3本以上の円圏で内区を構成する。	素	
2	2～1本の円圏。	素 鋸(小數)	
1	乳の間に神像と獣像を区別して配するもの。	鋸波鋸	7-1
2	神像の頭部を分離して獣像の背中に乗せて表すもの。	波櫛 波+蕨手	
1	竜の頭部が大きく、頭部全体がくちばし状のもの。	波櫛	7-2
2	竜の頭が細く、頭部全体が小さくなるもの。	波櫛	
a1	神獣像表現が精巧。獣像頭位は縦向き。近藤分類A Iタイプ。	三角緑鋸波鋸	8-1
a2	b系の影響で獣像頭位が斜めとなったもの。同A Iタイプ。	三角緑鋸波鋸	8-2
a2'	a1, a2と類似するが径が大きい。同A IIタイプ。	三角緑鋸波鋸	8-3
a3	獣像頭部は完全に横向き。表現は簡略化。火炎形文様なし。	三角緑鋸波鋸	
a4	獣像の下顎表現が一重に簡略化。	三角緑鋸波鋸	
a5	神獣像表現, 配置に大きな変化。神像の衣のひだの区分なし。	三角緑鋸波鋸	8-5
a6	神像を6つの塊で表現。神獣像の区別がつかないものも多い。	三角緑鋸波・波鋸	8-6
b1	小林が「踏み返し鏡」と認定した唐草文帯三神二獣鏡。	三角緑鋸波鋸	
b2	一神が小さく変形されて表されたもの。	三角緑鋸波鋸	
b3	表現と配置がa系列と合の子となったもの。	三角緑鋸波鋸	
1	神像に座像と立像の双方を表したものの。	斜緑鋸波鋸	9-1
2	神像が立像のみとなったもの。	斜緑鋸波鋸	9-2
1	獣像の下顎を明瞭に表現したものの。	斜緑鋸波鋸	9-3
2	獣像の下顎を省略あるいは頭で代用表現したものの。	斜緑鋸波鋸	9-4
1	同一方向に巡る5つの獣像の間に3神を配したものの。	鋸鋸波	10-1
2	1神となり, しばしば神像から離れた異形表現となるもの。	鋸鋸波	10-2
3	獣像のみとなったもの。神像を抜き取った空間を残す。	鋸鋸波 鋸鋸 鋸波	10-3
4	獣像の頭部が失われ, 胴部の表現のみとなったもの。	鋸鋸波 櫛櫛波 櫛波	10-4
1	六花文で雲雷文と四葉座を備えたもの。	素	10-5
2	六～五花文で雲雷文の省略されたもの。	鋸鋸波 鋸波 櫛波	10-6
3	五～四花文で四葉座が線表現あるいは省略されたもの。	櫛波	
a	乳から3本の短い脚が伸び, Ω形の囲いをもつもの。	鋸波鋸 鋸波/櫛波	11-1
b1	乳から長くて先端が強く渦巻いた4本の脚が伸びる。Ω形の囲いをもつもの。	鋸鋸波 鋸波	
b2	やや渦巻が弱く, 2～1本の脚となったもの。Ω形の囲いはある。	櫛櫛波 櫛櫛/櫛波	11-2
c	Ω形の囲いをもつが, 脚は短く, ないものもふくむ。	鋸鋸波 鋸波 / 櫛波	11-4, 5, 6
d	3本の脚表現はあるが, Ω形の囲いはないもの。	鋸波/櫛波 櫛櫛	11-3
e	脚が各方向に伸びて渦を巻き, 巴形の文様となるもの。	鋸波/櫛波 櫛櫛	
1	4体の神像表現に区別があるもの。	鋸鋸波	11-3
2	神像表現に区別がなくなり, 神像の胴が脚と区別のない袋状に表現されたもの。	鋸鋸 波櫛 重弧 矢羽	

複合鋸＝複合鋸齒文 突鋸鋸＝鋸齒文＋鋸齒文（内側の鋸齒文の先端を突線が回る） 獣＝獸文
鋸鋸波文＝鋸齒文＋鋸齒文＋波文 鋸波文＝鋸齒文＋波文 櫛櫛波＝櫛齒文＋櫛齒文＋波文

古墳時代仿製鏡の変遷とその特質（森下）

系 列 名	内 区 文 様	原 鏡
珠文鏡系	小さな珠文を、一列から数列、あるいは不規則に巡らす。	
重圏文鏡系	突線で4～1重の円圏を作る。突線の中には小さな珠文を連ねて線状にしたものがある。	
分離式神獸鏡系	神像の頭部を切り離し、獸像の背中の上に置く特異な変形をおこなう。	斜縁神獸鏡か
盤竜鏡A系	大きなくちばし形の頭部をもち向かい合う竜を表現。竜の間には方形の枠表現がある。	盤竜鏡(交互式)
三角縁神獸鏡系	三角縁神獸鏡のうちの獸文帯三神三獸鏡と唐草文帯三角縁三神二獸鏡を主たる原鏡としたもの。	三角縁獸文帯三神三獸鏡（三角縁波文帯三神三獸鏡その他の鏡式の影響もあり） 三角縁唐草文帯三神二獸鏡
斜縁神獸鏡B系	斜縁神獸鏡に表された2種類の神像のうち、立像に着目して、神像をすべて立像で表すもの。	斜縁神獸鏡
斜縁四獸鏡B系	斜縁四獸鏡を、大きな変形をほとんど加えずに忠実に模倣するもの。	斜縁四獸鏡
旋回式獸像鏡系	同一方向を向いて巡る5、6体の獸像を基本とし、間に神像などを配するものもある。乳を用いて神獸像間を区分しないのは大きな特徴。	踏み返し鏡の対置式神獸鏡か
内行花文鏡鬘文系	花文間に、鬘状の単位文様をいれる。他の内行花文鏡系ではすぐに失われる四葉座を、変形が進んでも保持する。	内行花文鏡
乳脚文鏡系	小乳に脚状の線表現と乳を囲むΩ形表現をつけたものを鈕のまわりに巡らす。脚表現とΩ形表現の組合せの差によって5つの小系列に区分できる。内区文様自体にはb系を除いて変異の幅が少なく外区文様に鋸歯文を用いるか、櫛歯文を用いるかという基準によって二分する。	a系は房文鏡につながるか
交互式神獸鏡系	画像鏡のような平彫りの神像と、乳を取り巻く長い首をもった獸像が交互に配される。	踏み返し鏡の画文帯仏獸鏡か

外区文様略称 菱雲=菱雲文(数字は渦文数) 鋸波鋸=鋸歯文+波文+鋸歯文
鳥=細線表現の鳥文 羽=羽状文 素=素文 波櫛文=波文+櫛文
櫛波=櫛歯文+波文 櫛櫛=櫛歯文+櫛歯文 変=変形

(3) 各系列における外区文様

a 菱雲文から斜縁鋸波鋸文、複合鋸齒文、突線付鋸鋸文

単頭双胴神鏡系と方格規矩四神鏡系の初期型式の外区文様には、菱雲文と呼ばれる複雑な文様が用いられている。菱形のなかに細い凹線で渦文を入れたものを連ねるものである。田中琢の指摘するように、鑄型にこの文様を彫り込む場合、渦の部分は細い突線として彫り残すことになり、手間と技量が要求される。このためまず渦の数の減少の方向に省略化が進み、さらに技法的にはより簡単な、型押しによってできあがる鋸齒文や線描きの波文で構成される鋸波鋸文あるいは鋸文と交代する。文様構成が鋸波鋸文となるものは他にもいくつかの系統があるが、ここで問題としている外区文様は、いわゆる斜縁の縁部形態にともなうものがほとんどである。ここでは斜縁鋸波鋸文と呼んで区別する。鋸鋸文は、内側の鋸齒文帯の先端と重なるように太めの突線が巡るといふ特徴をもつ。これもまた文様構成が同じだけの他の外区文様とは区別できるものであり、ここでは突線付鋸鋸文と呼ぶことにする。

単頭双胴神鏡系と方格規矩四神鏡系では、そうした外区文様の变化と内区文様の变化の連動が明瞭である(図二・三)。単頭双胴神鏡系ではa 1式↗a 2式(図二―1、2)で菱雲文内の渦の数が減少し、a 3式やa 4式(同3)ではほとんどが斜縁鋸波鋸文となる。内区主文がやや異なる変化を遂げるb系では菱雲文(同4)から複合鋸齒文(同5)や斜縁鋸波鋸文(同6)などを用いるようになる。単頭双胴神鏡系とよく似た神像表現をもつ対置式神獸鏡系でも、菱雲文はもっぱら1式に用いられている。方格規矩四神鏡系では1式↗4式(図三―1↗3)まで渦の減少が進み、4式において突線付鋸鋸文が現れ、5・6(同4・5)式ではすべて突線付鋸鋸文となる。

単頭双胴神鏡系では渦巻状の文様として残されたS字形の獣像など痕跡的な表現となった文様要素が認められる。また方格規矩四神鏡系については田中琢によって、半円方形形帯や乳など種々の文様要素が内区獣像の変化と対応することが確かめられている^②。そうした内区文様の变化と連動する以上のような外区文様の变化は、時間の変化につながるものとみて

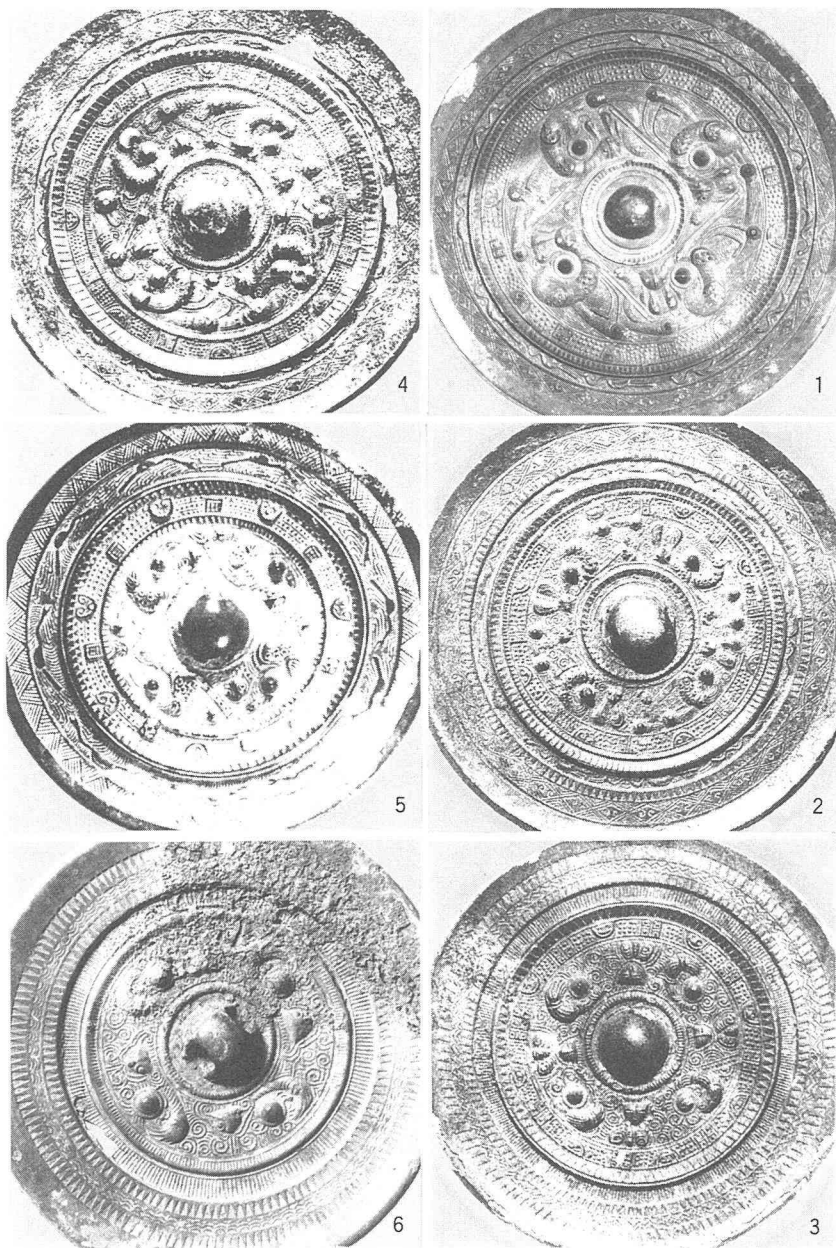


図2 単頭双胴神鏡系 (1: a1式 2: a2式 3: a4式 4: b1式
5: b2式 6: b3式)

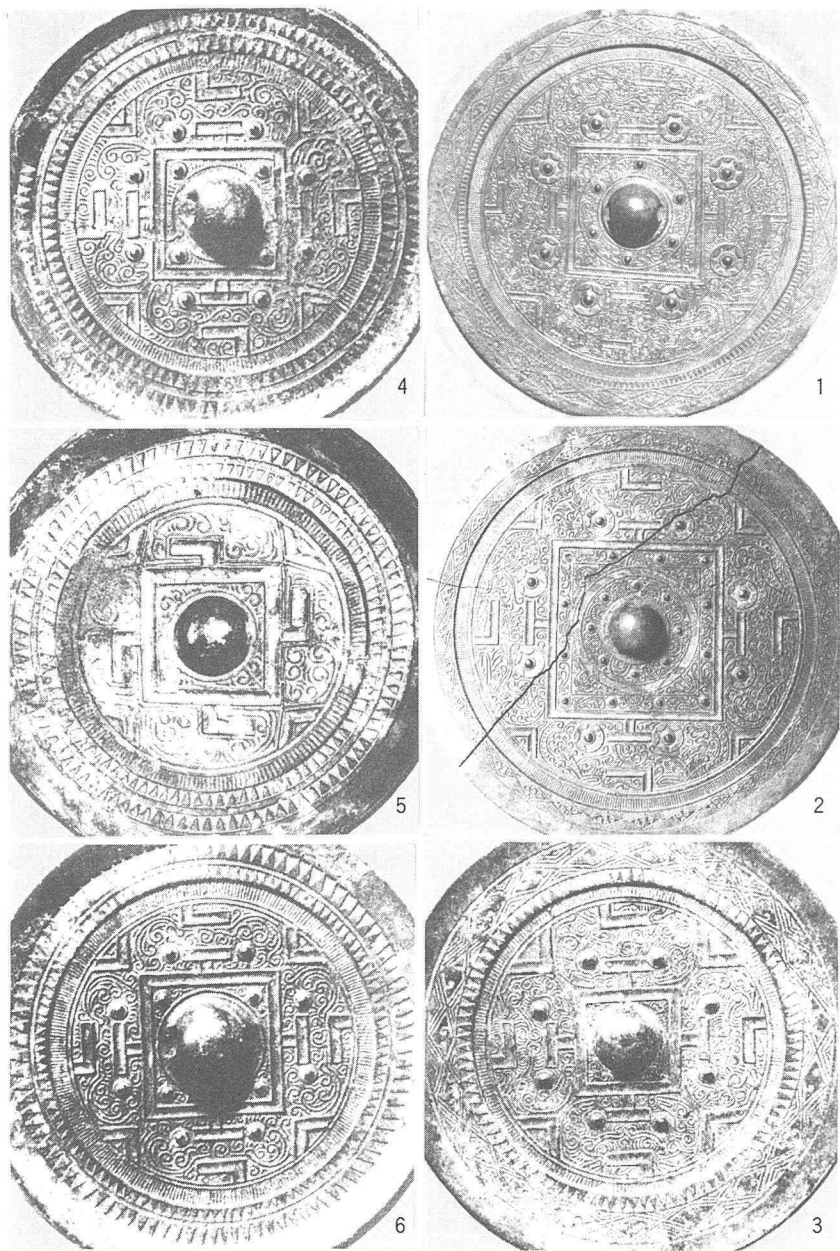


图3 方格规矩四神镜系 (1:1式 2:2式 3:4式 4:5式 5:6式)
方格规矩鸟文镜系 (6)

よいだろう。ただし、斜縁鋸波鋸文、突線付鋸鋸文は、これらの系列内で生み出されたものとしては説明がでない。後で述べるように、他の系列から取り入れられた外区文様である。

b 複合鋸齒文と羽状文

単頭双胴神鏡系 b 2・b 3 式の外区には複合鋸齒文と羽状文を用いる例がある。これらは限られた時期に使用された外区文様であるが、中国鏡や仿製鏡の変遷の中ではこの文様の起源を説明できない。複合鋸齒文は例えば石製腕飾類など古墳時代前期の他の製品にも用いられているので、おそらく他の器物一般に流行した文様を取り入れたものと考ええる。羽状文の起源もよく分らないが、おそらく単頭双胴神鏡系の外区文様

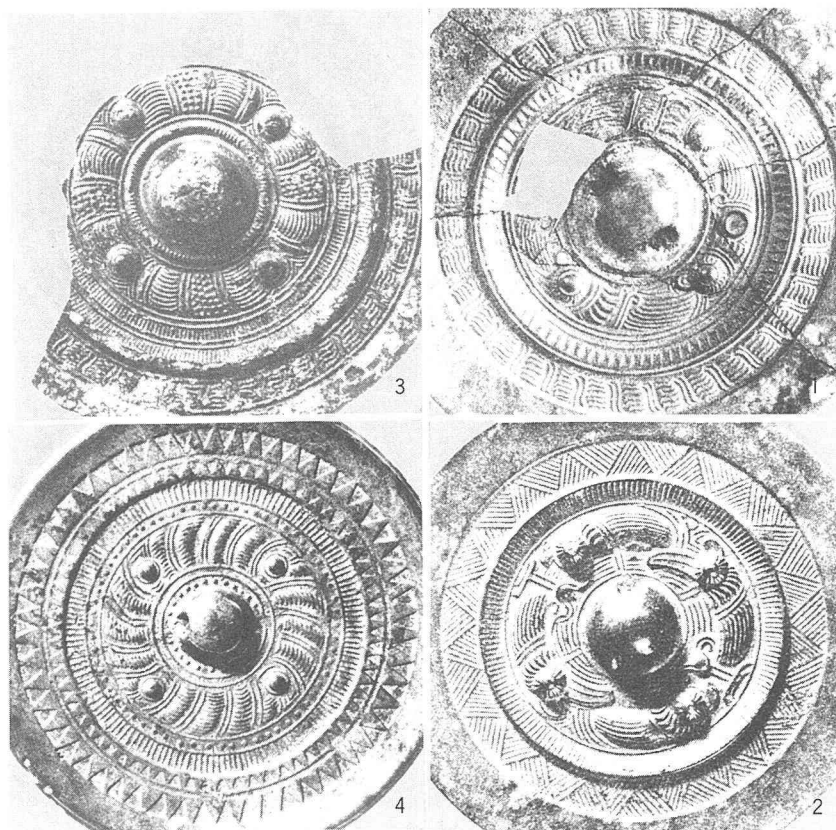


図4 獸毛文鏡系 (1, 2: 1式) 俵文鏡系 (3: 1式) 羽文鏡系 (4: 1式)

の内側を巡る怪鳥文と関連するものと考える。

これらの外区文様をもつ獣毛文鏡系と俵文鏡系は、内区文様においても単頭双胴神鏡系と関連が深い。獣毛文鏡系はその名のとおりに、すくなくとも1式の内区文様は単頭双胴神鏡系の獣毛文とそっくりである（図四—1、2）。俵文鏡系の内区文様も、単頭双胴神鏡a系の神像の胴の表現に類似する（図四—3）。両者は単頭双胴神鏡系の文様の一部を借用したもので、単頭双胴神鏡系より遅れて出現したものと考える。複合鋸歯文と羽状文は両系列の1式で使用されるが、2式では素文のものが多くなる。羽状文と複合鋸歯文の盛行時期は単頭双胴神鏡系のb2～3式

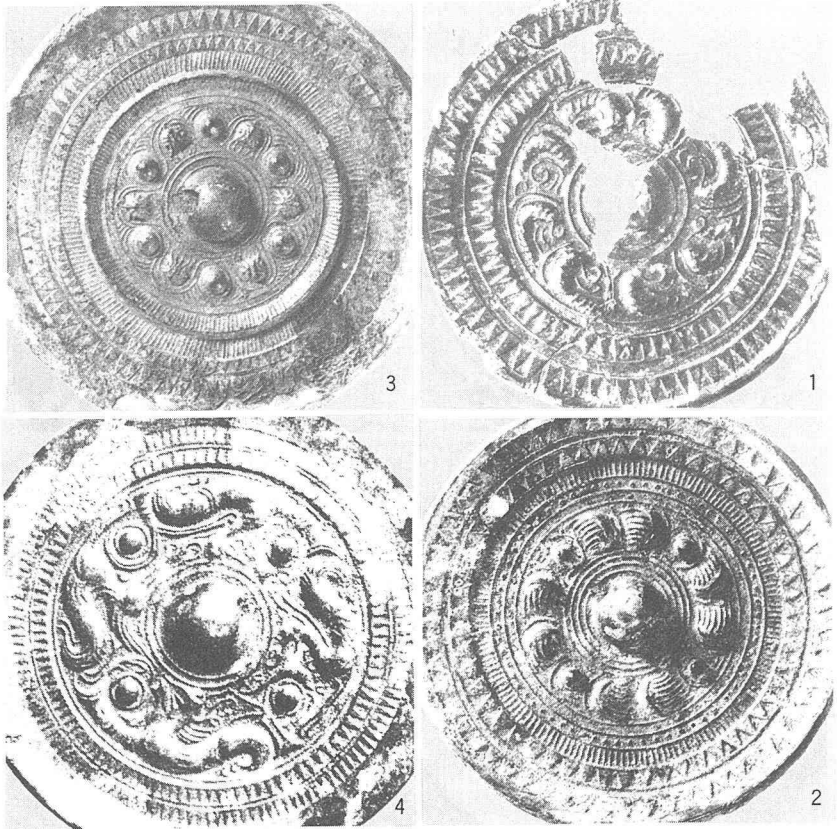


図5 三日月文鏡系（1：1式）房文鏡系（2：1式）神頭鏡系（3：2式）鳥頭四獸鏡系（4：2式）

と平行するものと推定する。

c 突線付鋸鋸文から鋸文

方格規矩四神鏡系5・6式の主要な外区文様となる突線付鋸鋸文は、羽文鏡系（図四―4）、三日月文鏡系（図五―1）、房文鏡系（同2）、神頭鏡系（同3）、鳥頭四獸鏡系（同4）などの主要な外区文様である。各系列の中でさらに一条の鋸齒文帯が省略され、鋸文が外区文様に用いられるようになる。菱雲文より一段階遅れて採用されたものと考えられ、かつ比較的短期間に用いられたものであり、時期の指標として有効な外区文様である。

突線付鋸鋸文は、鳥頭四獸鏡系の原鏡となる上方作銘半肉彫獸帯鏡の外区に認められるので、鳥頭四獸鏡系から他の系列に広まったものであろう。

突線付鋸鋸文から鋸文への変化と内区文様の変化との対応は神頭鏡系でもっとも明瞭に認められる。頭部に縮小した胴部表現や翼手状表現のつく1式は突線付鋸鋸文を主とし、鋸文を外区文様とするものは2式にのみ認められる。羽文鏡系、房文鏡系、三日月文鏡系についても、内区文様の省略化の程度と用いられる外区文様は一致する。ただし三日月文鏡系においては、節がほとんど見えないほどに省略された3式に、素文のものが多い。これは鋸文を、さらに省略したものと考える。

d 少数の外区文様

以上の文様と同じ時期に用いられたものであるが、少数例しか見いだせない外区文様について簡単に触れておく。方格規矩四神鏡系では、菱雲文の他に唐草文、五銖銭入りの獸文、波頭文、波鋸文などが前半の型式で用いられている。いずれも中国鏡の外区文様を忠実に取り入れたものであるが、他の系列にもごく僅かに例があるのみで、後にも続かない。短期間に一部で用いられた外区文様である。単頭双胴神鏡系などにみられる蔽手文、獸脚文は起源は不明であるが、変遷過程を追うことができ、ある程度の期間存続したものと思われる。蔽手文の古い形は単頭双胴神鏡系b1式にみられる。鋸

波鋸文のなかでも、縁部形態が平縁に近く鋸歯文が幅広のもの（平縁鋸波鋸文）、波文の外と内側に二重の突線が巡り、しばしば波文の中に珠文や短線を入れるもの（重圈鋸波鋸文）などは、斜縁鋸波鋸文とは別に中国鏡から取り入れられたもので、方格規矩四神鏡系の後半型式、斜縁四獸鏡A系の前半型式に用いられている。

e 素文から鋸文、斜縁鋸波鋸文

以上 a ~ d に挙げた外区文様は、多くが大型品と中型品に認められるものである。しかし珠文鏡系のような小型品と、原鏡の外区が素文である内行花文鏡系の仿製鏡は、当初は素文を外区に用い、次第に一部で鋸歯文を取り入れるようになったものと考えられる。

外区文様の变化と内区文様の变化をもっともよく追求できるのは珠文鏡系である。珠文鏡系の内区は、珠文の数が増え、さらに当初は比較的整然と並べられていたものが乱雑に埋め込む方向へ推移したものと想定する。この考えにしたがって、外区文様との対応関係を見ると、珠文を一一列並べた内区をもつ1式と2式では、素文と鋸文がほぼ同数であるが（図六一1）、一一列の3式では（同2）鋸文を中心に鋸鋸文、鋸波文など鋸歯文を用いた外区文様が三分の二以上を占める。さらに珠文を乱雑に埋める4a式（同3）やまばらに埋める4b式（同4）では、鋸波文などが半数を占めるほか、櫛波文を用いたものが多い。櫛歯文を用いた外区文様は、もっとも新しい時期に用いられたものである。

内行花文鏡系は多くの系列を設定できる可能性があるが文様が単純であるため、十分な細分ができていない。ここでは文様構成などによって明瞭に抽出できる二つの系列（内行花文鏡A系 図六一5、同B系 図六一6）と、中型品で花文外周に櫛歯文を多用する点などに特徴を持つ系列（同C系 図六一7・8）を表一に示した。後者の系列は花文間の単位文様にいくつかの種類があつて細分できる可能性がある。いずれの系列においても花文数の減少とその他の単位文様の省略の方向に変化したものと考えられるが、外区文様の变化は一樣ではない。内行花文鏡A系とB系ではほとんどが素文の外区を保持する。C系では花文の減少などと平行して外区に突線付鋸鋸文を用いる例（図六一8）が目立つようになるが、全てがそのよ

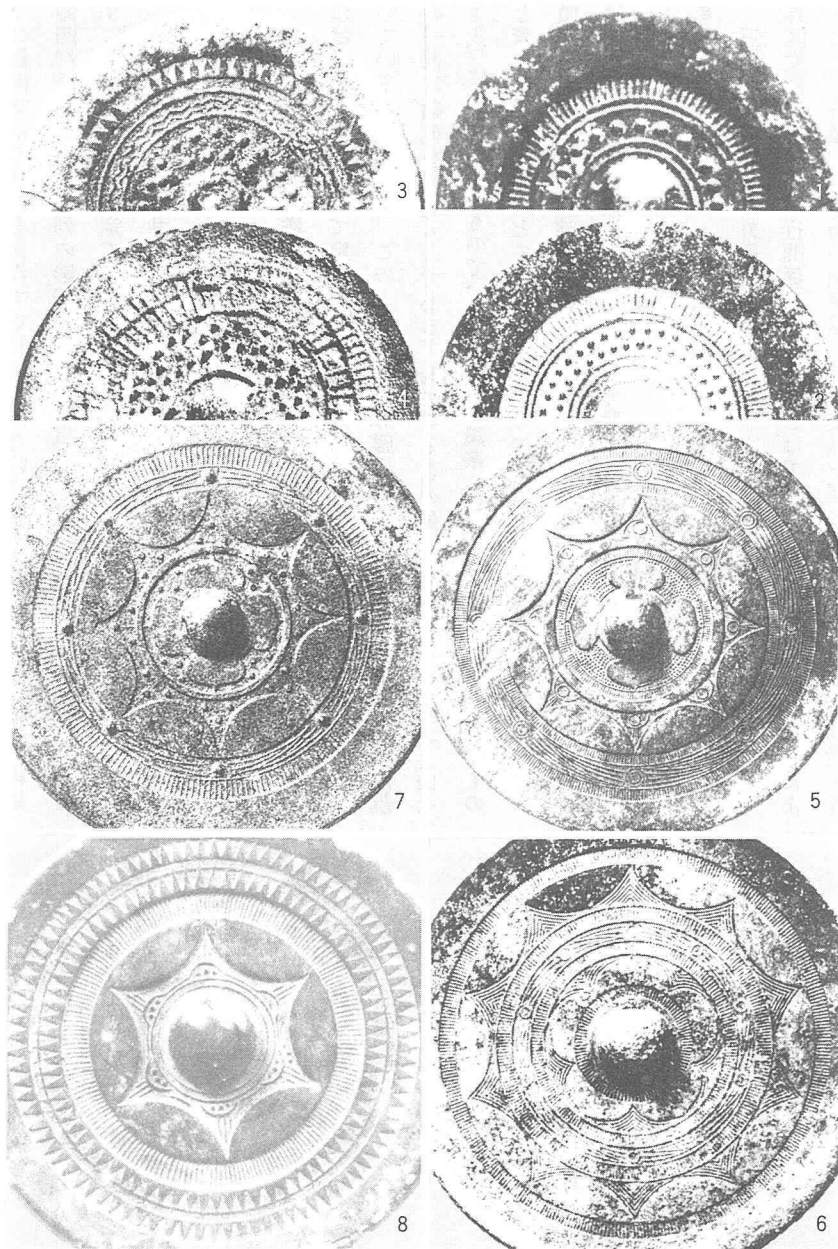


図6 珠文鏡系（1：2式 2：3式 3：4b式 4：4a式）
 内行花文鏡A系（5） 同B系（6） 同C系（7：1式 8：2式）

うな鋸歯文系の外区と交代するわけではない。C系については後半に方格規矩四神鏡系や他の系列の影響から鋸歯文系の外区文様を一部に取り入れるようになったものと想定でき、平行関係を考えることが可能である。

A系とB系は他と共通する要素を見いだすが、出土古墳の年代からC系に先行して出現していたものと想定している。

f 波櫛文

波文十櫛歯文の文様構成となるものである。こうした文様をもつ外区の中には、内区にくらべて縁部がきわめて厚く、その角が小さな三角形状に突出しているものがある。このような縁部形態をもつ波櫛文は、中国鏡の盤竜鏡の一部に類例をみるものである。おそらくこの外区文様は盤竜鏡A系(図七―1)に本来属するもので、分離式神獸鏡系(同2)はそれを取り入れたものと考えられる。他の系列とのつながりを認めにくいのが、分離式神獸鏡系の神像の頭部表現は単頭双胴神鏡系のa4式に共通するところがある。この外区文様はa~eの外区文様よりもやや遅れて取り入れられたものと考えておきたい。

g 三角縁鋸波鋸文

三角縁鋸波鋸文を外区とする鏡群、すなわち三角縁神獸鏡系の仿製鏡も、外区文様によって平行関係を定めることはできない。既に指摘されてきたように、三角縁神獸鏡系の仿製鏡は外区文様や径に関して他と異なる特徴をも

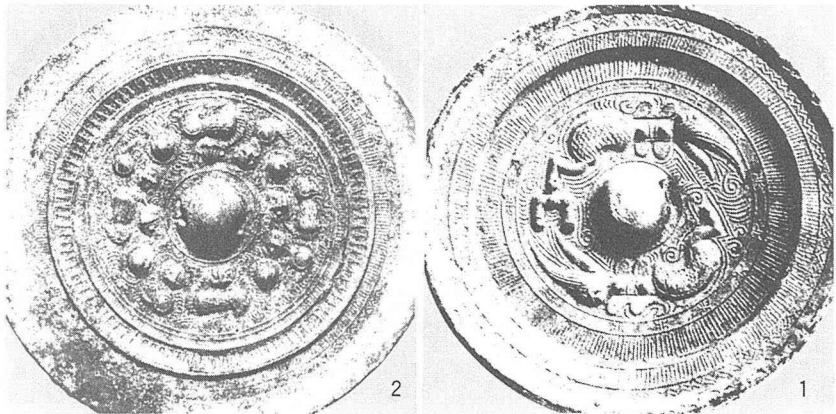


図7 盤竜鏡A系(1:1式) 分離式神獸鏡系(2:2式)

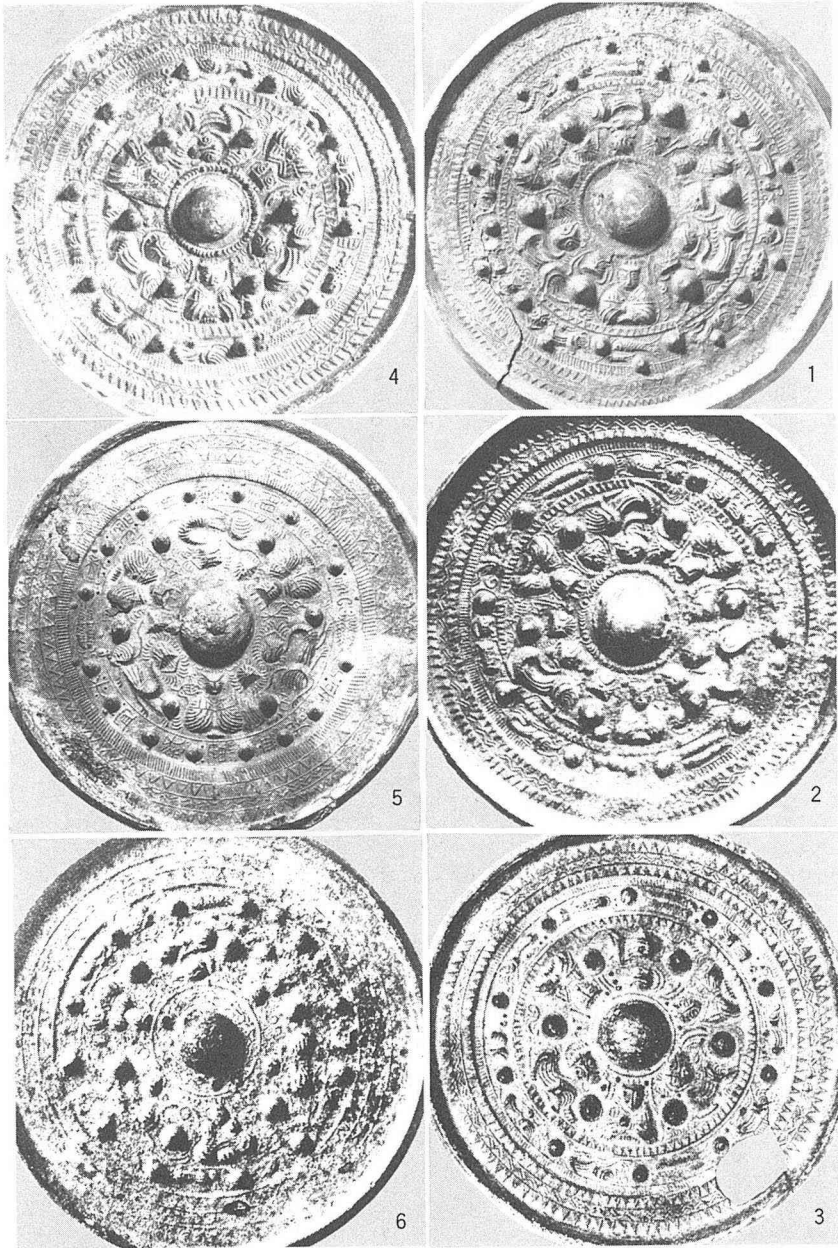


図8 三角縁神獸鏡系（1：a1式 2：a2式 3：a3式 4：a4式
5：a5式 6：a6式）

つ。すなわち、断面三角形に突出した縁部と鋸波鋸文の外区文様を堅持し大きさについてもほとんど変化がない、という点である。

後で触れるように、この系列の型式細分は、前期古墳副葬鏡の組合せをみる際に重要である。これまで小林行雄、近藤喬一によって細かな分析と分類がおこなわれ、さらに近年岸本直文により三段階に整理されている。^⑤本稿では、後に述べる出土古墳での組合せの検討のためにより細かい分類が必要であり、小林行雄の分類を時間的に整理した案を示しておく(図八)。

三角縁神獣鏡系の仿製鏡には外区文様や径のほかにも、多量に同範鏡が存在すること、鑄型の荒い彫り直しや、仕上げの粗雑さ、破砕した鑄型の再利用など鑄造技法においても特異が点がみられる。また一文字が脱落し全体が反転している奇妙な銘文であるが、確実に文字を知る者の関与を示す例がある(図八—5)。それと対応して他の系列によくみられる擬銘帯を用いた例がない。鑄造技法や知識などの点でも他の系列とは大きな開きがあり、製作者の違いに基づくものと考えられている。

h 斜縁鋸波鋸文

斜縁鋸波鋸文は、中国鏡の斜縁神獣鏡や斜縁四獣鏡から取り入れられたものである。中国製斜縁神獣鏡は、古墳時代前期でもやや新しい段階の古墳から出土するので、新たに普及した中国鏡の影響を受けて広まった外区文様と考える。斜縁神獣鏡の模倣品にはいくつかの系列が認められるが、ここで斜縁神獣鏡B系としたものが現在資料的にまとまっている(図九—1、2)。また斜縁四獣鏡B系も中国鏡を比較的忠実に模倣し、他の系列の文様をまじえない点で斜縁四獣鏡A系とは区別できる(同3、4)。この二つの系列をはじめとし、神獣鏡や四獣鏡や盤竜鏡を模倣し、斜縁鋸波鋸文を外区とするものは、単頭双胴神鏡系や方格規矩四神鏡系のように他の中国鏡の単位文様を盛んに取り入れ系列間の単位文様の交換も活発な系列群とは異なり、原鏡にあまり手を加えないという様式的特徴をもつ。

a、eで触れた単頭双胴神鏡系などで新たに採用された斜縁鋸波鋸文は、これらの系列から取り入れられたものと考えられる。新しい段階になると鋸歯文を外区に用いる傾向は、多くの系列で認められる現象であるが、こうした斜縁鋸波鋸文のみを用いる系列の影響があったものと考えられる。特に鋸歯文とともに波文を合わせ用いる手法は新しい傾向である。鋸波文とcで取り上げた鋸文とは文様構成上では波文の有無の違いに過ぎないが、系統を異にする外区文様である。

i 変形鋸波鋸文

斜縁鋸波鋸文の変形によって二つの種類の外区文様作り出された。双方とも斜縁鋸波鋸文の波文部が広くなり、また縁部全体が薄くなると

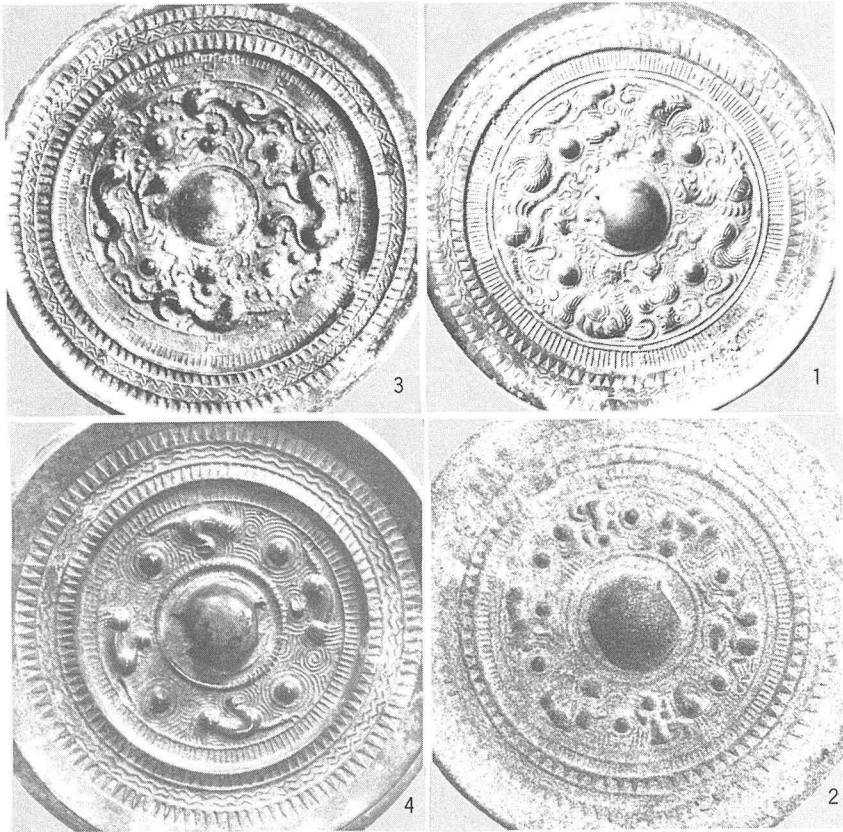


図9 斜縁神獸鏡B系（1：1式 2：2式） 斜縁四獸鏡B系（3：1式 4：2式）

同時に内側の鋸歯文が外傾し、界圈状の突起が生み出されている。一つは波文が三条以上に多条化したもの（変形鋸波鋸文a種）、もう一つは本来波文の部分を突線表現の菱雲文と置きかえたもの（変形鋸波鋸文b種）である。これらは明らかに斜縁鋸波鋸文に後出するものであり、限られた時期に用いられた外区文様である。

j 鋸鋸波文からの省略

鋸鋸波文は後半期の仿製鏡の平行関係を考える軸となる外区文様である。外側から順に鋸歯文+鋸歯文+波文となる特殊な文様構成で中国鏡には例がない。これは明らかに変形鋸波鋸文から文様構成の変化によって生み出されたものであり、変形鋸波鋸文に後出する外区文様である。この鋸鋸波文から省略を進めることにより、鋸波文^⑥、櫛櫛波文、櫛櫛文、櫛波文などの外区文様が生み出されてゆく。いずれも後半期の仿製鏡の指標となる外区文様である。これらの外区文様にとりなう縁部形態にも特徴があり、外区と内区の間が明瞭でなくなっている。内区と同一面に外区文様が施されるものも多い。この形態もまた変形鋸波鋸文に後出することを示している。

内区文様と外区文様の対応がもっとも明確なのは旋回式獣像鏡系である。1・2式はほとんど全てが鋸鋸波文を採用している（図一〇—1）。3式はほぼ半数が鋸鋸波文を用い（同2、3）、特に獣像表現の明確なものに多い。獣像の頭部表現が小さいものでは、鋸鋸文、鋸波文を用いるものが多く、櫛波文を用いたものもある。4式も半数が鋸鋸波文か鋸波文を用いているが、櫛櫛波文、櫛波文を用いた例が増える（同4）。

このように対照すると、鋸鋸波文から、波文あるいは鋸歯文を一条省略して鋸鋸文あるいは鋸波文が生まれ、さらに鋸歯文の省略形として櫛櫛文を用いて、櫛櫛波文、櫛波文が現れる変遷の傾向が明らかとなる。こうした外区文様の変遷は他にもいくつかの系列で確かめることができる。

内行花文鏡髭文系は2式からこの鋸鋸波文を採用し（図一〇—5）、省略の進んだ3式では鋸波文、櫛波文が用いられている（同6）。乳脚文鏡系は5つの小系列に区分できるが、そのうちのb系列では内区文様の变化と外区文様の变化の対応

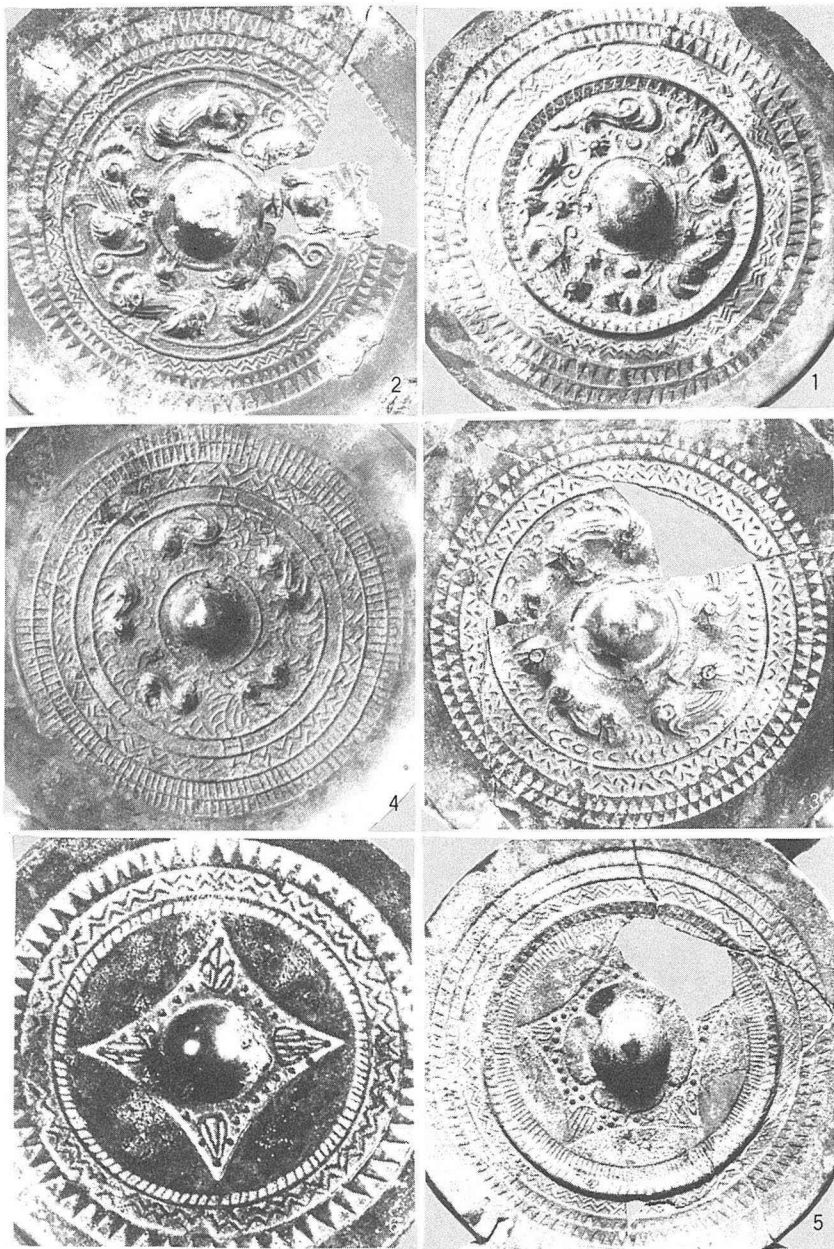


図10 旋回式獣像鏡系（1：2式 2：3式 3：3式 4：4式）
内行花文鏡髭文系（5：2式 6：3式）

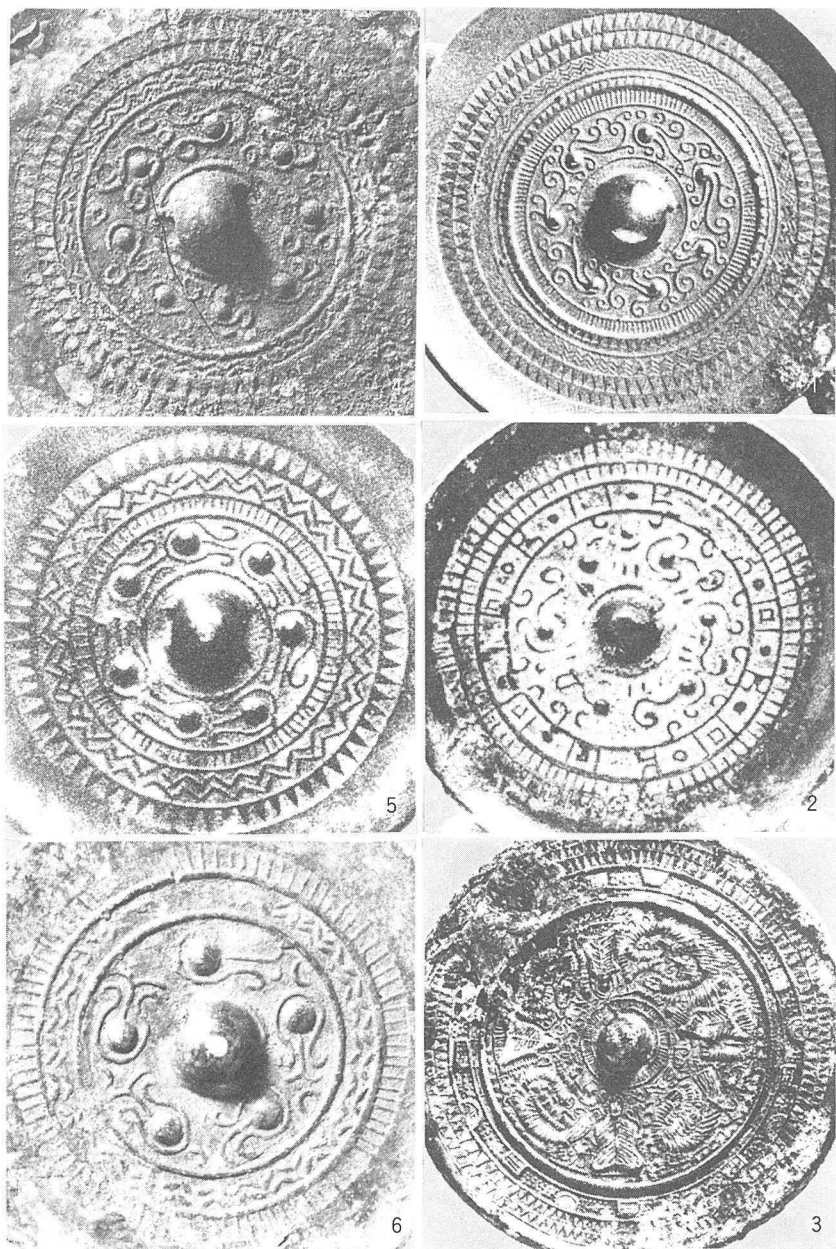


图11 乳脚文鏡b系(1: b1式 2: b3式) 同c系(4, 5: c1式 6: c2式)
交互式神獸鏡系(3: 1式)

が認められる。鋸鋸波文を用いた1式は、脚が四本で先端の渦の巻が強い小乳を内区にめぐらす（図一—1）。脚が二本となった2式では鋸波文と櫛波文となり、さらに脚が一本となった3式は、櫛櫛波文、櫛櫛文などで占められる（同2）。他の四つの系列では主文の変異が小さく、内区文様で型式分類をおこなうのは難しいが表一に示したように、外区文様が鋸齒文主体のものと同櫛齒文主体のものに二分でき、鋸鋸波文をもつものもある（図一—4～6）。さらにやや変則的ではあるが交互式神獸鏡系も、鋸鋸波文あるいはその変形版は1式にみられ（同3）、2式ではやや異形の外区文様が用いられるようになっていく。

以上のように、旋回式獸像鏡系、内行花文鏡髭文系、乳脚文鏡b系など複数の系列で、内区文様の省略化の段階と、鋸鋸波文↓鋸鋸文・鋸波文↓櫛櫛波文↓櫛波文という外区文様の省略化の段階とが符合する。なお珠文鏡系の外区文様もこれらと同様の歩みを進め、末期型式は櫛櫛文あるいは櫛波文を外区とする（図六—4）。

（4） 外区文様の変遷

前半期の外区文様の変化の中心となるのは、鋸齒文指向と表現できる流れである。直径二〇cm以上の大型品をふくむ系列では一般的に、菱雲文から突線付鋸鋸文、斜縁鋸波鋸文など鋸齒文系の外区文様を採用するに至る（前節のa）。内行花文鏡系の一部の系列や小型品では素文から次第に一部で鋸齒文系の外区文様を用いるようになる（e）。そして主に中型品の系列ではこれらより一段階遅れて採用されたと考えられる、複合鋸齒文や羽状文、波櫛文など様々な経路から取り入れられた外区文様が用いられる（b, c, f）。一方には独自の外区を守り通した三角縁神獸鏡系のようにこの流れに乗らないものもある（g）。それらの系列の消失後は斜縁四獸鏡B系を中心に中型鏡では鋸波鋸文が、小型鏡では鋸波文というように、鋸齒文と波文を用いた外区文様に統一化が進む（h）。後半期の外区文様の変化過程は、斜縁鋸波鋸文からの変形、省略化という表現でほぼ一括できる（i, j）。

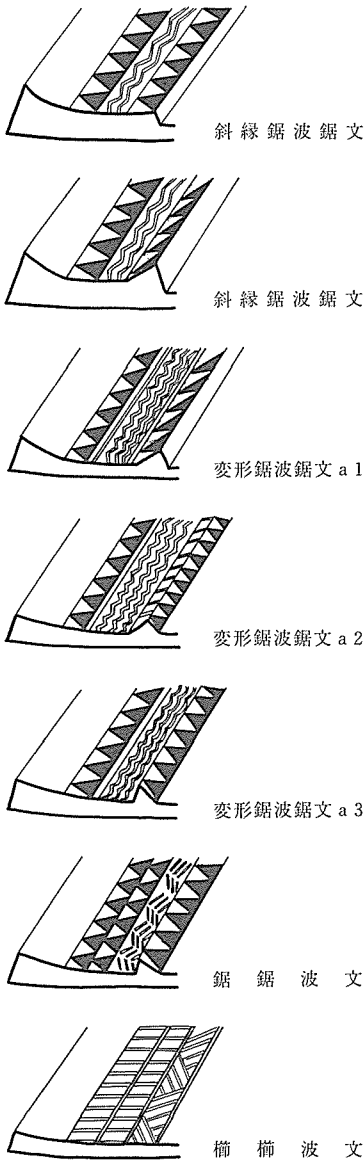


図12 外区文様と断面形態の変化

こうした文様の変化は、外区の断面形態の変化とも一致する。初期の外区は肥厚して内区側との間に段をもつものがほとんどである。段部が界圏と一致するものや小型鏡ではこの段が目だたないものも多いが、外区と内区の違いや段の存在が意識されている。斜縁鋸波鋸文以降は、外区が薄くなる方向への型式学的な変化を追うことができる（図二二）。変形鋸波鋸文の段階では、段部を強調したものや、段部のみが突出してその外側は薄くなって、段部が界圏状を呈するものが見られる。この界圏状の突起は、本来外区の段部であった部分の痕跡的表現である。鋸波鋸文、櫛波鋸文と省略の進行とともにこの界圏状表現も消失して、外区文様と内区文様が同一面に施され、区別されないようになる。

このように仿製鏡の外区文様には一定の変化方向が認められ、時期推定の有力な指標となることが明らかであろう。これまで検討されてきた種々の小さな単位文様の共通性によってもこれは検証しうる。一つの文様要素は一定の重複期間をもって新しいものと交代するのが自然であるから、厳密な先後関係の分析にはより多くの要素の分析を合わせる必要があるが、外区文様が有効な基準であることは確かであろう。以上の検討をもとにした編年の結果を表二に示した。

① 以下、直径一—cm以下を小型鏡、一五—一八cm前後を中型鏡、二〇cm以上を大型鏡とする。田中琢『古鏡』(前掲)六四頁。

② 田中琢「方格規矩四神鏡系倭鏡分類試論」(前掲)。

③ hとiで取り上げる外区文様には、波文の変形から一見複合鋸齒文状にみえるようなものがあり、区別を要する。

④ 突線付鋸鋸文は多くの系列に共通する外区文様であるが、平行関係の基準とした方格規矩四神鏡系の末期型式は量的に少なく、前後にや

や時間幅をもつ可能性がある。

⑤ 小林行雄「仿製三角縁神獸鏡の研究」(前掲)。近藤喬一「三角縁神獸鏡の仿製について」(前掲)。岸本直文「三角縁神獸鏡製作の工人群」(『史料』第七二巻第五号 一九八九年)一一四—一三頁。

⑥ 鋸波文は珠文鏡系など、いくつかの系列では斜縁鋸波鋸文から直接省略形として生まれたものがある。鋸鋸波文の省略から生まれたものとは異なり、外区と内区の間段がある。

三 時期区分と様式

出土古墳の検討の結果から想定した外区文様や各型式の年代は表二の編年表に付したとおりである。これに基づいて本章では各時期の仿製鏡の特徴の抽出を試み、さらに生産体制についても考察を進める。

(1) 四世紀の仿製鏡

前章a—gの外区文様をもつ仿製鏡は、四世紀から五世紀前半の古墳から出土するものが大半である。それ以降の年代の古墳から出土する例も他との比較から、長期間保持された後に副葬されたものと推定できるものである。いずれも、その出現は四世紀にあったと推定できる外区文様である。またhの斜縁鋸波鋸文も中心は五世紀にあるが、始まりは四世紀に求められる外区文様である。

滋賀・雪野山古墳^②、大阪・紫金山古墳^③は、四世紀中葉に位置づけられ、仿製鏡を出土した古墳の中で石製腕飾品など鏡以外の要素からも古く位置づけられる。雪野山古墳からは古い型式の三角縁神獸鏡とともに、単頭双胴神鏡系b1式が出土している。単頭双胴神鏡系の登場が四世紀中葉を降らないことを示す。また紫金山古墳出土のいわゆる「勾玉文鏡」に

表3 三角縁神獸鏡系仿製鏡の型式の共伴関係 *数字は面数

出土古墳	型式		a1		a2	a2'	a3		a4	a5	a6
					b1	b2	b3				
大阪・紫金山古墳			1		1	1	6				
奈良・新山古墳			1				1				
大阪・御旅山古墳					3		1				
岡山・鶴山丸山古墳			1				1				
山口・長光寺山古墳							3				
京都・百々ヶ池古墳							1		1		
愛知・出川大塚古墳									2		
福岡・銚子塚古墳									6	2	
岐阜・長塚古墳2号棺									1	1	
大阪・ヌク谷北古墳											2
佐賀・谷口古墳東石室											2
佐賀・谷口古墳西石室											2
福岡・沖ノ島17号遺跡							1				2
福岡・沖ノ島18号遺跡									1		

は、すでに指摘されているように、方格規矩四神鏡系3・4式に用いられたものと共通の鳥文が表現されている。^④やはり方格規矩四神鏡系の起源が四世紀中葉を降らないことを示している。これらの資料から、菱雲文をもつ仿製鏡の型式が四世紀中葉以前に現れていたことが窺われる。また滋賀・安土瓢箪山古墳^⑤もおそらく四世紀中葉に遡る古墳であるが、中央石室から斜縁神獸鏡B系1式が出土しており、斜縁鋸波鋸文をもつ系列も同時期に登場していたものと推定できる。

三角縁神獸鏡系の仿製鏡もこれらの系列と変わらぬ時期に出現していたものと考えられる。ここでは詳しい論証は省くが、三角縁神獸鏡系の仿製鏡は製作後、配布、入手に至るまでの過程がきわめてスムーズにおこなわれたものとみられ、表三に示すように、隣接する型式が各古墳でまともに出土する傾向が強い。表三では出土した中でもっとも新しい型式に注意するなら四段階、a4式とa5式の間、の型式変化の大きさに着目するなら二段階に分けてとらえられる。必ずしも古墳の年代の新旧とむすびつくものではないが、^⑥すくなくとも各古墳の主が鏡を入手した順番、そして製作の順番を残しているものと推測する。これらと他の系列の仿製鏡との共伴関係を見ると、三角縁神獸鏡系のa1～a3式には単頭双胴神鏡系や方格規矩

四神鏡系の前半型式をとまなうものが多く、a4～a6式には羽文鏡系、房文鏡系、神頭鏡系など複合鋸齒文、羽状文、突線付鋸齒文のような一段階遅れて出現したものと考えた外区文様を用いる系列をとまなう例が目だつ。これらは将来資料の増加を待って、前期古墳の副葬鏡の組合せの細分の材料となるものと考ええる。ともかく三角縁神獸鏡系の仿製鏡が他の系列に先行したという小林行雄の見解は成立しがたく、両者が平行して存在したことを示している。

一方、当初素文を外区とする内行花文鏡系や珠文鏡系もほぼ同じ時期に登場し、平行して存在したものと考える。そのうちの内行花文鏡A系は、先の雪野山古墳のほか、奈良・桜井茶臼山古墳^⑦からも同類と考えられる破片が中国製三角縁神獸鏡の古い型式とともに出土しており、四世紀中葉以前に出現が求められる。珠文鏡系は、直接そうした大型品をもつ系列との共伴例は少ないが、京都・馬場遺跡の方形周溝墓や福岡・宮ノ本遺跡^⑧五号墳でそれぞれ1式と2式が出土した例は、すくなくとも四世紀を降るものではなく、かつその古い段階に遡る可能性が高い。また他の1・2式の出土例の多くも、四世紀を降らせる理由は見あたらない。珠文鏡系のように従来小型という理由のみで年代を引き下げられがちであったものも四世紀中葉に近い段階あるいはそれ以前に出現していたと考えた方がよい^⑩。

以上のように、単頭双胴神鏡系と方格規矩四神鏡系、斜縁神獸鏡B系、三角縁神獸鏡系、内行花文鏡A系、そして珠文鏡系など、複数の系列が初期の段階から出現していたものと考えられる。こうした多様性こそが四世紀の仿製鏡の大きな特色であり、それは早い段階から形成されていた。羽状文、複合鋸齒文、突線付鋸齒文などの外区文様はそれらに一段階遅れて出現したものと考えるが、それはさらに仿製鏡の多様性を増すことになった。この段階においては、鏡に対して多くの需要が存在し、それが多彩な系列の並存、増加に反映したものと考える。

これらの系列は終末年代もほぼ等しいものと考えられ、各系列の終末型式を出土した福岡・沖ノ島一七号遺跡^⑪（単頭双胴神鏡系a4式）、岡山・鶴山丸山古墳^⑫（方格規矩四神鏡系5・6式）、佐賀・谷口古墳^⑬（房文鏡系2式、羽文鏡系2式）、福岡・鋤崎古墳^⑭（俵文鏡系2式）などから五世紀の初頭には主要な変遷を終えていたものと推測できる。

この時期の生産者の様子についてもここでは考察しておきたい。当時の工房の遺構がまったく不明であり、製作者集団、生産体制の復原は困難であるが、次のような側面を推測する。

単頭双胴神鏡系と対置式神獸鏡系は、外区文様のみならず、神像表現などがほぼ一致する。獸毛文鏡系、倭文鏡系、羽文鏡系、房文鏡系などの内区文様、斜縁四獸鏡A系、神頭鏡系や分離式神獸鏡系の神獸像頭部の表現は、単頭双胴神鏡系の文様の一部や神像表現と共通する。これらの系列群は同一の製作者集団の製品としてとらえられる可能性が強い。単頭双胴神鏡系の特異な文様は、中国鏡の各鏡式の一部を切り取ってきたものを合成して生み出されたものと考えるが、獸毛文鏡系などの内区文様も単頭双胴神鏡系の一部を切り取って生み出されたものであり、神像の頭部と胴部を切り離して造形された神頭鏡系と分離式神獸鏡系も、凶像の分離と合成という手法に共通する面をもつのである。方格規矩四神鏡系も外区文様につながりをもち、また目につきにくい小さな単位文様の共通性が指摘されている。¹⁵これらの文様要素は各系列間で交差的な共通関係を示しており、製作者の共通性あるいは強い関連性を物語るものと思われる。ここに、分布状況からみて明らかに畿内に存在し、製品の種類の豊富さや生産量からみて大規模な協業形式を形成していたこの時期の中心的な製作者集団を見いだすことができる。

これとは別の製作者集団の存在も推測できる。三角縁神獸鏡系が文様、銘文の知識、製作技術などにおいて他の系列から大きく分離できることは先に述べた。おそらく一つの系列の製作のみに関わった製作者集団を示すものとみられる。¹⁶また珠文鏡系なども、中心的な系列群の衰退後も長期間存続している点からみて、異なる製作者を含む可能性がある。

四世紀の仿製鏡の多様性はこうした、中心的な製作者集団の中で多数の系列が生産されていたことと、異なる製作者集団が存在したことの二つの面から生み出されたものと考ええる。この時期は仿製鏡生産のもっとも盛んな時期であり、多様な外区文様と系列の並存を特色とする。量的には総出土量の三分の二近くを占めている。一古墳への大量副葬はそうした状況と結びついた現象の一つであるが、さらに鏡を複数出土した古墳においては、複数の系列を取り混ぜて副葬する傾向

の顯著な点に着目しておきたい。一方で、珠文鏡系や内行花文鏡系のうちの小型鏡を一面のみ副葬する古墳も数多く、それらは広い地域に一樣な広がりを示している。そこには出土古墳の規模等において、多種類の鏡を副葬する古墳との違い、階層差が認められる。総括すれば四世紀を中心とし、五世紀の前葉に至るまで、仿製鏡の各種類には様々な需要にもとづいた多くの意味の違いが強く存在し、それが多彩な系列の並存に結びついたものと考えられるのである。しかも、こうした分化した鏡の製作・使用体系は早い段階から成立しており、すくなくとも仿製鏡の出現後に徐々に形成されていったものではない。このような製品と製作者の双方の面で分化した生産体制が、弥生時代の青銅器生産とどのようなつながりをもつのか、今後の課題である。しかしここで認めた中心的な系列群において初期型式にもっとも精緻な表現をもつ優品があり、その後は省略、退化が進められてゆく過程に注意するならば、仿製鏡生産の開始、あるいはその初期の段階に大きな飛躍のあったことは推測できよう。

(2) 四世紀末～五世紀中葉の仿製鏡

鋸歯文を用いた外区文様への統一化は、四世紀から徐々に進められ五世紀に完成したものと考えるが、その画期を四世紀末の斜縁四獣鏡B系の登場に置くことにしたい。この系列は中国鏡のきわめて忠実な模倣に成功し、かつその後もあまり変形の手を加えないという特徴をもつ。単位文様の種類が豊富でその交換も活発な四世紀の仿製鏡とは明らかに一線を画しており、文様の簡素化という新たな傾向を代表する系列と評価できる。京都・久津川車塚古墳^⑧や熊本・江田船山古墳^⑨をはじめとして、豊富な副葬品をもつ古墳からの出土例が目だっており、出土状況からみても五世紀の一つの中心となった系列であることは確実である。この系列の製作者は、文様の模倣の技法において、四世紀の中心的な製作集団とは異なる系統に属するものと推測する。ただし分布状況は依然として畿内を中心としており、生産の中心は畿内にあったものと考えられる。

珠文鏡系のような小型鏡の製作も五世紀に引き続いておこなわれており、この時期の古墳から出土する珠文鏡は、他の系列と同じように鋸波文を外区に用いる4式が主体となる。出土状況には重大な変化があって、大型の古墳や豊富な副葬品をもつ古墳に出土が限られてくる。

このように五世紀を中心とする系列はいくつか存在はするけれども、系列の数とその数量的内容、出土古墳の状況からみて、五世紀の特に中葉前後は仿製鏡生産の下降期であり、鏡の所有者が限定化された時期と考える。

(3) 五世紀後葉から六世紀の仿製鏡

鋸波文から櫛歯文を主体とする外区文様への推移が型式学的な変化として説明できることを先に述べた。²⁰ これらはいずれも五世紀後葉以降の古墳から出土する仿製鏡の外区文様である。これは単に外区文様の変化にとどまらず、新たな系列群が統一的な外区文様をもって登場したことを意味し、仿製鏡の大きな画期としてとらえられるものである。

鋸波文をもっとも多く利用している旋回式獸像鏡系では、2式に五世紀末を降らない古墳の出土例がいくつか含まれている。²¹ 3式に関しても岡山・四ツ塚一三号古墳B主体、²² 滋賀・雲雀山古墳での須恵器との共伴例等から五〇〇年前後に位置づけられる。旋回式獸像鏡系1・2式と3式の大部分は、五世紀の後葉を中心とし、六世紀の前葉に若干かかる時期に納まるものと考えておきたい。また、4式の製作年代に関しても、兵庫・鬼神山古墳例²³ などから六世紀の前葉を中心とするものと考えられる。したがって鋸波文の用いられた時期はほぼ五世紀後葉から六世紀前葉までと想定できる。²⁴ このことは他の系列でも確かめることができ、乳脚文鏡系では鋸波文を用いた例をもつ、茨城・上野古墳²⁵、同・三昧塚古墳²⁶ (c1式)は、五世紀の後葉から六世紀の前葉に位置づけられる古墳である。同様にして鋸波文もほぼ平行する時期にあったものと位置づけられる。

櫛歯文を用いた外区文様が、六世紀を中心することは多くの出土例から明らかであるが、²⁷ その中でも櫛波文十界圏あ

るいはその省略形となる櫛波櫛文と、単に櫛波文となるものとは、前者が先行したものと考えられ六世紀前半に位置づけられる。櫛波文は滋賀・山津照神社古墳(乳脚文鏡系c 2式)、京都・奉安塚古墳(乳脚文鏡系a 2式)、京都・桃谷古墳(乳脚文鏡系c 2式)、福岡・夫婦塚一号墳(乳脚文鏡系c 2式)などから、六世紀中葉〜七世紀前半を中心とする。

このように五世紀後葉以降に現れる系列の外区文様は、ほぼ同一の歩みを進めたものとみられる。また、これらの系列は、中子を必要とする鈴鏡の鑄造にも成功しており、比較的高度な技術を共有することになる。製作者は同一か、すくなくとも互いに密接な関連をもつものと推定する。出土状況は広範囲に比較的均一に分布するのが特徴であり、仿製鏡の新たな形での普及を示すものである。従来各系列から鈴のついた鏡のみを取り上げ、その分布が東国に偏ることが説かれているが、以上のような編年に基づくならこの時期は均一な分布状況を示しているというべきである。畿内に圧倒的に中心をもつ前代までとは異なる状況であり、生産の中心地を分布から見いだすのは困難である。ただし、統一的な外区文様があり方や鑄造技術からみて中心的な製作集団が各系列の製作にあたったものと考えられる。鋸鋸波文の出自が斜縁鋸波鋸文に求められることからみて、引き続き畿内に中心があったものと考えるのが現状では妥当であろう。

外区文様においてやや異なる歩みを進めたものと考ええる交互式神獸鏡系は、1式に僅かに鋸鋸波文を用いた例があるほかは、様々の特異な外区文様を用いており、やや異なる位置に属する系列である。年代は福岡・壽命王塚古墳、奈良・烏土塚古墳、静岡・宇洞ヶ谷横穴、奈良・藤ノ木古墳などの出土例から、2式の主体が六世紀中葉〜後葉にあることは確実である。七世紀初頭の築造とされる愛媛・上三谷一号墳出土鏡はこの系列の末期型式とみられ、同時に仿製鏡の最後の姿の一つを示すものと考ええる。

交互式神獸鏡系を含めて、六世紀後半〜七世紀初頭の古墳から出土する型式の多くは、明らかに各々の系列において省略を進めた結果の末期型式である。すなわち各地で前方後円墳が築かれなくなる頃にほぼその製作を停止したのと思われる。古墳時代の始まりとともに登場した仿製鏡は、実質的な古墳時代の終末とともにその役割を終えたのである。

五世紀後葉以降の仿製鏡は残存的なものとしてとらえられることが多いけれども、むしろこのように新たな普及を遂げたものとみるべきである。量こそ第一の段階に及ばないものの、旋回式獣像鏡系をはじめとして東北地方から九州南部にいたる広範な分布圏を獲得している。特に四世紀の系列と異なるのは分布状況であり、畿内に集中せず、各地に比較的均等に分布している点である。五世紀後葉の時期については、現在古墳時代の大きな画期として検討が進められており、政治体制の変革と結びついた仿製鏡の生産体制の変革としてとらえられる可能性がある。

（4）鏡の様式的な変遷

ここまでの検討から古墳時代仿製鏡の変遷について、多彩な外区文様をもつ数多くの系列が平行して存在する四世紀を中心とする段階、鋸波鋸文や鋸波文に外区文様の統一化が進むと同時に小型化、系列の減少などが起きた四世紀末から五世紀中葉を中心とする段階、外区文様は鋸波鋸文からの変形、省略によって生み出されたものをほぼ共通して用い、各系列が整理・固定化され分布状況にも変化が認められる五世紀後葉から六世紀の段階、という三つの段階として理解できることが判明した。

三つの段階は、同時期に用いられた中国鏡あるいはそれと関連する鏡群の違いと結びついている。すなわち第一の段階となる四世紀の古墳には方格規矩四神鏡や内行花文鏡などの前漢末～後漢の鏡、画文帯神獸鏡などの新式の漢鏡や特殊な性質をもつ三角縁神獸鏡等、様々な種類の中国鏡が副葬されるのである。そして中国鏡と仿製鏡の関連は密接であり、多様な中国鏡の模倣、変形をもとに各種の系列が製作されている。複数の鏡式の中国鏡を組み合わせて一つの系列の文様としたり、系列同士の単位文様の交換も活発である。前述のように鏡の果たしていた機能の多様性を物語るものであり、仿製鏡の製作は多様性を拡大するものであった。第二の段階となる四世紀末から五世紀中葉の古墳からは、双頭竜文鏡、方格T字文鏡など小型品が目だつようになるが、仿製鏡の小型化、簡素化と重ね合わせられる要素と考える。第三の段階の

仿製鏡は、小林行雄によって倭の五王の海外交渉と関連づけられた、^⑨画文帯神獸鏡、画像鏡、獸帯鏡等の踏み返し鏡と同時期に登場し、それらが広範に分布する特徴と重なり合う。この段階においては仿製鏡の各系列が整理、編成し直されたものと考えられる。中国鏡（踏み返し鏡）と仿製鏡が相互に補完して新たな秩序を形成するようになったものと考ええる。

こうした対応は三つの区分が仿製鏡のみならず、古墳時代の鏡全体の様式的な変遷として総合的にとらえられることを示している。古墳時代において鏡の果たした役割は四世紀を頂点として、段階的に衰微していったものとする考えがあるけれども、以上のような様式区分は、各時期に鏡をめぐる異なる方向の運動があったことを示している。

① 年代観の詳細は別稿で細かく触れることにし、本稿では流れの記述にとどめる。ここでの基準は、まず前期については西暦二八〇—三〇〇

〇年を古墳時代の始まりとし、さらに四世紀を四区分した都出比呂志の案を参考とし、後期については田辺昭三の須恵器編年を基に埼玉・

種荷山古墳の墳丘出土のTK四七式の須恵器が同古墳篠塚出土鉄剣銘の「辛亥年」Ⅱ西暦四七一年に重なるものとし、MT一五式を六世紀前葉とする見解に立つ。都出比呂志「前期古墳の新旧と年代論」（『考古学雑誌』第六七巻第四号 一九八二年）一一九—一二三頁。同「前方後円墳出現期の社会」（『考古学研究』第二六巻第三号 一九七九年）一七—三四頁。田辺昭三「須恵器大成」（一九八一年）。

② 都出比呂志編「雪野山古墳」（雪野山古墳発掘調査団 一九九〇年）。北條芳隆「腕輪形石製品の成立」（『待兼山論叢』史学篇第二四号 一九九〇年）七三—九六頁。

③ 小林行雄「柴金山古墳の調査」（『大阪府の文化財』一九六二年）六一—六六頁。

④ 田中琢「鐔剣鏡」（前掲）一〇七頁。

⑤ 梅原末治「安土瓢箪山古墳」（『滋賀県史跡調査報告』第七冊 一九

三八年）。

⑥ たとえばa1式の出土古墳の中には、後円部に長持形石棺の祖形的な石棺を用い四世紀でも新しい段階に属する京都・妙見山古墳の前方部粘土椀からの出土例が含まれている。梅原末治「向日町妙見山古墳」（『山城における古式古墳の調査』京都府文化財調査報告第二一冊 一九五五年）四八—七三頁。

⑦ 中村春寿・上田宏範「桜井茶臼山古墳 附楠山古墳」（『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第一九冊 一九六一年）。

⑧ 木村泰彦「左京第一七六次（7ANLZS地区）調査概報」（『長岡京市埋蔵文化財センター年報』一九八九年）八六—八九頁。

⑨ 太宰府市教育委員会「宮ノ本遺跡」（『太宰府町の文化財』第三集 一九八〇年）。

⑩ なお珠文鏡系で1・2式の特徴とした一列の珠文をもつものの中には、六世紀以降異なる系統のものがあるが、区別は可能である。資料の増加を待って、A系、B系として区別したい。たとえば福島・中田横穴出土鏡。馬目順一編『中田裝飾横穴』（『いわき市史』別巻 一九七一年）。

- ① 原田大六「十七号遺跡の遺物」(前掲)。
- ② 梅原末治「備前和気郡鶴山丸山古墳」(『日本古文化研究所報告』第九 近畿地方古墳墓の調査三 一九三八年) 三〇—五二頁。
- ③ 梅原末治「肥前玉島村谷口の古墳」(『佐賀県文化財調査報告』第二集 一九五三年)。
- ④ 柳沢一男・杉山富雄『鋤崎古墳』(『福岡市文化財調査報告書』第一二集 一九八四年)。
- ⑤ 田中琢『鐔鏡』(前掲) 一〇七頁。同『古鏡』日本の原始美術八(前掲) 六八—六九頁。同『古鏡』日本の美術一七八(前掲) 二八—二九頁。同『方格規矩四神鏡系倭鏡分類試論』(前掲)。
- ⑥ 福永伸哉は鈕孔形腿の検討から、三角縁神獸鏡系の仿製鏡製作工人と、ここで単頭双胸神鏡系、方格規矩四神鏡系、内行花文鏡系とした仿製鏡の工人を別系統と説き、製作開始時期についても後者が先行した可能性を考える。福永伸哉「三角縁神獸鏡の系譜と性格」(『考古学研究』第三一卷第一号 一九九一年) 三五—五八頁。
- ⑦ 仿製鏡の製作開始時期については、四匹の獸を表した仿製鏡を出土した京都府芝ヶ原古墳において庄内式土器が出土したことから、古墳出現期と同時期あるいはそれ以前に遡らせようとする議論が起きた。芝ヶ原鏡に関しては、同系列の資料を見いだしておらず、その後への展開は明らかでない。また芝ヶ原鏡の外区の鋸波鏡文は、非常に鋸齒文が細かく、ここでいう斜縁鋸波鏡文と同列には扱えない。今後の資料の蓄積を待ちたい。川崎公敏・近藤義行『芝ヶ原古墳』城陽市埋蔵文化財調査報告書第一六集 一九八七年)。都出比呂志「墳輪編年と前期古墳の新古」(小野山節編『王陵の比較研究』一九八一年) 三五—四六頁。同「前期古墳と鏡」(京都府埋蔵文化財調査研究センター編『謎の鏡—卑弥呼の鏡と景初四年銘鏡』一九八九年) 二二—五七頁。
- ⑧ 梅原末治「久津川古墳研究」(一九二〇年)。
- ⑨ 梅原末治「玉名郡江田船山古墳調査報告」(『熊本県史跡名勝天然記念物調査報告』第一冊 一九二二年)。小田富士雄「江田船山古墳出土」仿製鏡の異同について」(『肥後考古』第三号 一九八三年) 四一—四四頁。
- ⑩ 前章で取り上げた変形鋸波鏡文a種およびb種は五世紀後葉に位置づけられる。
- ⑪ 近藤義郎「四つ塚第一三号墳の発掘」(『藤山原』一九五四年) 七〇—一三五頁。
- ⑫ 直木孝次郎『滋賀県東浅井郡湯田村雲雀山古墳調査報告』(『大阪市立大学文学部歴史学教室紀要』第一冊 一九五三年)。
- ⑬ 是川長「鬼神山古墳」(『神戸市文化財調査報告』九 一九六七年)。
- ⑭ 福岡・七夕池古墳出土の内行花文鏡系仿製鏡の外区は鋸鋸波文であり、埋葬施設構造や琴柱形石製品の出土から与えられる五世紀前葉の年代は、鋸鋸波文をもつものとしてはもっとも古い例である。ただし、この資料には、初期の鋸鋸波文と必ず組にして用いられた界圍がなく、別系統から生み出された文様構成の可能性がある。上野精志「七夕池遺跡群」(一九七五年)。
- ⑮ 松尾昌彦・滝沢誠「上野古墳出土遺物の再検討」(『関城町史』一九八八年) 一六三—一七五頁。
- ⑯ 斎藤忠・大塚初重他『三味塚古墳』(一九六〇年)。
- ⑰ 愛知・志段味大塚古墳と三重・泊古墳出土の渦巻状の文様をもつ仿製鏡(同範)、巴形の文様をもつ愛知・松ガ洞第八号墳出土鏡は、同伴遺物からみると五世紀を降らないが、外区にはすでに櫛齒文を採用している。鋸鋸波文から櫛齒文主体の外区文様への変化は、出土古墳の年代を検討するとかなり早い速度で継起的に進められ、各外区文様の重複期間も一定以上あったものと考えられる。久永春男・田中稔他

『守山の古墳』(一九六三年)。

⑳ 島田貞彦『近江国坂田郡能登瀬の古墳』(『歴史と地理』第一五巻第三号 一九二五年) 六四―八二頁。

㉑ 杉原和雄他『福知山高校資料室収蔵品目録―考古資料編―』(一九八九年)。

㉒ 樋口隆康『峰山桃谷古墳』(『京都府文化財調査報告』第二三冊 一九六〇年) 五三―八三頁。

㉓ 塩原勝利『夫婦塚古墳』(『福岡市埋蔵文化財発掘調査報告』第五一集 一九八〇年)。

㉔ 梅原末治・小林行雄『筑前国嘉穂郡寿命王塚裝飾古墳』(『京都帝國大学文学部研究報告』第一五冊 一九四〇年)。

四 古墳時代仿製鏡の変遷とその特質

内区文様の分類による系列の設定と、外区文様の分析を中心とした系列間関係の復原によって、古墳時代仿製鏡全体の編年を作成し、様式的な変遷観を提出するとともに、その生産体制の一端についても考察を進めた。最後に仿製鏡の変遷の特色とその意義についてまとめて結論としたい。

一見多種多様にみえる仿製鏡にも、一つの内区文様を継承してゆく系列が存在することを確認した。仿製鏡の文様の多様性はそうした系列が多数存在することと、各系列内で省略化、変形が急速に進められることから生み出されたものである。その中には外区文様の变化を中心として文様につながりをもつ、主体となる系列群が存在する。そしてこの中心となる系列群においてはすくなくとも二度にわたる系列群の交代があることを明らかにした。

仿製鏡のように一つの系列内での変化が基本的に退化、簡略化ととらえられる点は古墳時代の金属器、例えば裝飾付大刀などと共通する特徴と認められる。^{①②}一方甲冑などでは、製作技術の簡略化という側面もあるが、現実には根ざした需要に

⑳ 伊達宗泰・岡幸二郎・菅谷文則『烏土塚古墳』(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第二七冊 一九七二年)。

㉑ 向坂鋼二他『掛川市洞ヶ谷横穴墳発掘調査報告』(『静岡県文化財調査報告』第一〇集 一九七一年)。向坂はこの系列の存在を指摘し、その起源が踏み返し鏡の画文帯仏獣鏡に求められることを説いている。

㉒ 榎原考古学研究所編『斑鳩藤ノ木古墳概報』(一九八九年)。

㉓ 谷若倫郎『上三谷古墳群Ⅱ』(『愛媛県埋蔵文化財調査センター』『県営圃場整備事業埋蔵文化財調査報告書』一九八八年)。

㉔ 小林行雄『倭の五王の時代』(『日本書紀研究』第二冊 一九六六年『古墳文化論考』(前掲)所収)。

したがって次々と改良と技術革新が導入されていった進行型の生産の変遷が明らかにされている。^③ 両者の差は、基本的には祭器や儀器と実用品との間の用途の違いに基づくものであるが、なんらかの生産形態の違いをも問題にできる余地がある。

仿製鏡の各系列における変化は、主として一つの工房内あるいは工人集団内で文様が受け継がれていった中での経年的な変化と考えるが、文様の継続性はきわめて薄い。すくなくとも当初は人や獣としてその姿が理解されて描かれたことの窺われる図像が、次の段階においては単なる渦巻や頭部を失った異様な図像へと容易に化してしまう。中国の思想に沿った神像や獣像の表現を保ち得ないのは当然としても、人物、動物といった図像の基本的な知識が継続されなかった面には、工人間の知識の維持・伝達方式、引いては生産状況自体に断続的な面があったものと推測する。そこに初期の生産組織の一つの類型を抽出しうるかもしれない。

注意しなければならないのは、そうした退化の過程は各系列に個別的なものであり、仿製鏡全体では多数の系列が生起と消滅を繰り返し、結果として、ほぼ古墳時代全期を覆う長期にわたって生産が存続しえた点である。四世紀におそらく一部は鏡と同等の機能を共有し、祭器や儀器として用いられた他の各種の製品が五世紀以降に姿を消す様と対比できる特徴である。継続を支えた一方には生産組織を強力に支えた勢力の存在が考えられるとともに、鏡に対する幅広い需要、その開始と終末が前方後円墳の存続とほぼ一致することが示すように古墳時代の社会的特質と結びついた需要と、これまでその存在の注意されていなかった、すくなくとも二度にわたる変革の果たした役割も大きいと思う。それは中国鏡の変化や流通状況の変化ともつながり、おそらくは鏡のもつ意味そのものの変化であろう。古墳時代のような社会的な変化が急速に進行した時代の中での継続が可能であったのは、社会の様々な需要にあわせて自らのもつ意味を分化・変容できた点にあると考える。鏡は道具としての現実的・機能的な制約が少ないためその価値は人の与える意義づけにほとんど依拠している。したがって文様の変更を媒介として新たな価値を容易に生み出すこともできるのであり、政治的な象徴、祭祀用

品あるいは単なる貴重品など、様々な利用目的に幅広く対応できる。こうした加工の可能な点にこそ、多彩な仿製鏡が大量に生産されたことについて、単なる中国鏡の不足をおぎなう代用品といった説明にとどまらない、積極的な理由を求めたい。日本の古代社会を特徴づける鏡の盛行の理由の一面を、仿製鏡の変遷にもっとも端的に表れた、鏡の多義性と可変性に見いだしたい。

① 和田晴吾「金属器の生産と流通」『岩波講座日本考古学』3 生産と流通 一九八六年）二六三—三〇三頁。

② 新納泉「単竜・单鳳環頭大刀の編年」『史林』六五卷四号 一九八二年）一一〇—一四一頁。穴沢味光「日本における龍鳳環頭大刀の製作と配布—一つの試論—」『考古学ジャーナル』二六六 一九八六年）一六一—二二頁。

③ 野上文助「古墳時代における甲冑の変遷とその技術史的意義」『考古学研究』第一四卷第四号 一九六八年）一一—四三頁。小林謙一「甲冑製作技術の変遷と工人の系統」(上)『考古学研究』第二〇卷第四号 一九七四年）四八—六八頁。同(下)『考古学研究』第二二卷第二号 一九七四年）三七—四九頁。

〔謝辞〕 本稿の作成にあたっては小野山節先生のご指導をいただきました。本稿が成るまでに、小野山先生をはじめ、岡村秀典、高橋克壽両氏に多大なるご迷惑をおかけしております。和田晴吾、清水芳裕、菱田哲郎、千葉豊の各氏からは暖かい励ましの言葉と適切な助言をいただき、山中一郎先生、藤澤彰子氏をはじめとする京都大学考古学研究室、京都大学埋蔵文化財研究センターの諸兄には日頃より多くの恩恵を得ています。また、資料調査に当たっては左記の諸氏、諸機関にご協力をいただき、様々な御教示を得ました。末筆ながら心より感謝申し上げます。

赤沢 威・赤塚 弘美・阿久津 久・石川 悦雄・石川日出志・内川 隆・近江 昌司・岡内 三眞・岡本 一士・加藤 修
 亀井 明德・川村 博・川江 秀孝・瓦吹 堅・岸本 直文・河野 圭子・肥塚 隆保・近藤 協・沢田 正昭・菅谷 文則
 高橋美久二・田崎 博之・田中 琢・都出比呂志・角 浩行・那賀 教史・中井 正幸・中島 郁夫・中原 斉・西村 俊範
 西山 克己・樋口 隆康・日高 孝治・福永 伸哉・北條 芳隆・前田 洋子・溝口 孝司・向坂 鋼二・森 陽子・山内 一郎
 宮崎県総合博物館・西都原資料館・前原町教育委員会・伊都歴史資料館・九州歴史資料館・福岡県立糸島高等学校郷土博物館・九州

大学文学部考古学研究室・黒川古文化研究所・大阪市立博物館・山城郷土資料館・泉屋博物館・天理参考館・樞原考古学研究所附属博物館・雪野山古墳発掘調査団・近江風土記の丘資料館・南濃小学校・浜松市博物館・磐田市埋蔵文化財センター・東京大学総合研究資料館・明治大学考古学博物館・國學院大学考古学資料館・埼玉県立博物館・上総博物館・茨城県歴史館

〔挿図出典目録〕

図一

1 出土地不明 二五・四 cm

天理参考館蔵

2 奈良・佐味田貝吹古墳 二二・八 cm

樞原考古学研究所『馬見丘陵の古墳』(一九八八年)二〇頁下図

3 (伝)京都府南部 一七・二 cm

高橋美久二編『鏡と古墳』(一九八七年)二二一

4 福岡・沖ノ島一七号遺跡 二三・七 cm

宗像神社復興期成会『統 沖ノ島』(一九六一年)図版第二七

5 岐阜・舟木山二七号墳 一五・二 cm

榑崎彰一編『岐阜市史』史料編考古・文化財(一九七九年)図版九八

6 京都・吐師七ツ塚古墳 一三・六 cm

京都大学文学部博物館蔵

図三

1 京都・藤原稻荷古墳(伝) 二五・九 cm

天理参考館蔵

2 京都・温江丸山古墳 二八・八 cm

京都大学文学部考古学研究室保管

3 福岡・沖ノ島一七号遺跡 一七・八 cm

宗像神社復興期成会『統 沖ノ島』(前掲)図版第三三下

4 岡山・鶴山丸山古墳(伝) 一三・〇 cm

田中琢『鐔劍鏡』日本原始美術大系四 講談社(一九七七年)一六二図

5 出土地不明 一七・四 cm

梅原末治『欧米における支那古鏡』(一九三一年)図版第八五上

6 鳥取・重枝古墳 一五・七 cm

田中琢『古鏡』日本の美術一七八(一九八一)第四一図

図四

1 群馬・天神山古墳 一三・二 cm

京都国立博物館編『日本の黎明』(一九七九年)

2 出土地不明 一一・三 cm

樋口隆康『古鏡』(一九七九年)三六六図

3 京都・稻荷山三の峯 一三・二 cm

高橋美久二編『鏡と古墳』(一九八七年)二五四図

4 岐阜・前山古墳 一一・七 cm

田中琢『鐔劍鏡』(前掲)二〇一図

図五

1 京都・愛宕山古墳 一〇・二 cm

奥村清一郎『愛宕山古墳発掘調査概報』(『京北町埋蔵文化財調査報告書第』2集

一九八三年)図版第一二

図六

- 2 愛知・栗林古墳 一一・八 cm
齊藤嘉彦他『新編岡崎市史』史料考古下(一九八九年) 図版一〇〇
- 3 京都・愛宕山古墳 一二・〇 cm
奥村清一郎『愛宕山古墳発掘調査概報』(前掲) 図版第一〇
- 4 京都・西山四号墳 一一・五 cm
樋口隆康『古鏡』(前掲) 三五五図
- 1 大阪・弁天山B四号墳 六・四 cm
大阪府教育委員会『弁天山古墳群の調査』(『大阪府文化財調査報告』第一七輯(一九六七年) 図版B二七
- 2 福岡・藤崎遺跡第七号方形
周溝墓 七・〇 cm
浜石哲也編『藤崎遺跡』(『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第八〇集(一九八二年) 図版四八
- 3 福岡・乙植木三号墳 八・四 cm
藤方悦子・石山勲・粕屋郡須恵町所在遺跡群の調査』(『九州縦貫道関係埋蔵文化財調査報告』X 一九七七年)

図七

- 4 鳥根・鷺ノ湯病院跡 七・八 cm
樋口隆康『古鏡』(前掲) 四〇二図
- 5 静岡・松林山古墳 二八・六 cm
樋口隆康『古鏡』(前掲) 二九九図
- 6 福岡・沖ノ島一七号遺跡 一八・七 cm
宗像神社復興期成会『統沖ノ島』(前掲) 図版第二五
- 7 奈良・新山古墳 一六・三 cm
榎原考古学研究所『馬見丘陵の古墳』(前掲) 三六頁左上図
- 8 静岡・馬場平三号墳 一〇・八 cm
浜松市博物館蔵
- 1 出土地不明 一一・七 cm
樋口隆康『古鏡』(前掲) 三六六図
- 2 鳥取・北山二七号墳 一二・六 cm
山陰考古学研究所『山陰の前期古墳文化の研究』I 東伯耆I・東郷池周辺(『山陰考古学研究所記録』第2 一九七八年) 図版二八

図八

- 1 京都・寺戸大塚古墳 二二・七 cm
京都大学文学部博物館蔵
- 2 大阪・壺井御旅山古墳 二二・〇 cm
大阪府教育委員会『南河内石川流域における古墳の調査』(『大阪府文化財調査報告』第二集 一九七〇年) P.124
- 3 山口・長光寺山古墳 二二・五 cm
樋口隆康『古鏡』(前掲) 三一六図
- 4 福岡・銚子塚古墳 二二・七 cm
京都大学文学部博物館蔵
- 5 福岡・銚子塚古墳 二二・二 cm
京都大学文学部博物館蔵

図九

- 6 福岡・沖ノ島一六号遺跡 二〇・五 cm 樋口隆康『古鏡』(前掲) 三二五図
 1 滋賀・瓢箪山古墳 一三・四 cm 京都大学文学部博物館蔵
 2 大分・下山古墳 二一・五 cm 高橋徹・村上久和『豊の国創世紀展』(一九八七年) 一五〇—
 3 京都・久津川車塚古墳 一三・六 cm 高橋美久二編『鏡と古墳』(前掲) 二三七図
 4 静岡・坂上A五号墳 一一・三 cm 鈴木久雄氏蔵(浜松市博物館保管)
 上総総合博物館蔵

図一〇

- 1 千葉・モチ塚古墳 一三・四 cm 上総総合博物館蔵
 2 宮崎・持田古墳群 一二・九 cm 宮崎県総合博物館蔵
 3 宮崎・鈴鏡塚古墳 一三・三 cm 宮崎県総合博物館蔵
 4 奈良・三倉堂 一一・五 cm 京都大学考古学研究室資料カード
 5 群馬・古海天神山古墳 一二・七 cm 東京大学総合研究資料館蔵
 6 群馬・保渡田薬師塚古墳 九・〇 cm 田中琢『古鏡』日本の原始美術八(前掲) 第八二図

図一一

- 1 茨城・上野古墳 一二・九 cm 『茨城県史料』考古資料編(一九七四年) 図版六五
 2 福岡・こうもり塚古墳 九・二 cm 佐賀県立博物館『鏡・玉・剣』(一九七九年) 一四三頁
 3 福岡・寿命王塚古墳 二一・五 cm 田中琢『鐸劍鏡』(前掲) 一八三図
 4 茨城・三味塚古墳 一〇・一 cm 茨城県歴史館蔵
 5 静岡・文珠堂山古墳 九・五 cm 田中琢『古鏡』(前掲) 第二二六図
 6 京都・桃谷古墳 八・六 cm 京都大学文学部博物館保管

所蔵者・保管者名記載は筆者の撮影による。資料掲載にあたっては各所蔵者・保管者の御許可をいただいた。心より感謝申し上げます。また、京都・温江丸山古墳、京都・桃谷古墳、静岡・坂上A5号墳の出土鏡の資料掲載にあたっては、それぞれ横山浩一氏、樋口隆康氏、川江秀孝氏の御配慮を得ました。

(京都大学埋蔵文化財研究センター助手)

The Transformation of Japanese-made mirrors
仿製鏡 in the Kofun 古墳 Period

by

MORISHITA Shoji

It is a distinct feature of the Yayoi 弥生 and Kofun 古墳 Period that various Japanese-made mirrors had been manufactured taking mirrors imported from China as prototypes. This can be an important clue to the understanding of the society of that time. But basic research needed is inadequate. In particular, the chronology of Japanese-made mirrors in Kofun period has not been settled.

In this paper, I aimed to establish the chronology of Japanese-made mirrors in the Kofun Period. First, I classified the mirrors into 27 principal types based on the decoration of the central sections (内区文様). Second, by comparing the decoration of the peripheral sections (外区文様) corresponding to each type, I showed that various types had changed in accordance with the transformation of peripheral sections in common. I further set forth three stages of Japanese-made mirrors based on the tumulus chronology, and showed that the transformation paralleled the change in its distribution and in its imported mirrors assemblages. This new model of the transformation shows that mirrors had various functions corresponding to the variety of types, and these functions changed in the course of time. This points to an answer to the question why mirrors were in fashion in ancient Japanese society.